

# 古代オリンピック競技の歴史

阿 部 正 臣

## 序

歴史の陣頭に立つギリシア人はBC4000年頃には中部ヨーロッパ北部、エルベ川とウィトラ川流域に農耕を営む民族であったといわれる。言語学的にはインド・ヨーロッパ語族に属し、インドにアーリア人として侵入した東インド・ヨーロッパ語族と区別される西インド・ヨーロッパ語族の中の原始ギリシア語族である。原始ギリシア語族は東方ギリシア語族と西方ギリシア語族に分れる。このうち東方ギリシア語族はウィトラ川をさかのぼり、ドニエステル川やドニエプル川を下って黒海沿岸にでて、BC2000年頃にギリシアの東海岸と小アジアに南下してきた。この民族（後のアイオリス人、イオニア人、アルカデア人）がギリシア各地に侵入し、ギリシア本土は民族移動と戦争のうちに、やがて彼らは先住民を従え、海を渡ってクレタ文明を破壊し、ここに新しい初期のギリシア文明、ミケーネ文明を築きあげた。一方、後のドーリア人となった西方ギリシア語族はプタペストあたりを南下してドナウ川流域に停帯していたようであるが、かなり東方ギリシア語族との連絡もあったらしく、一部は東方ギリシア語族の移動に加った。しかし、大部分は同じ頃にバルカン山脈越えを企て、セルビア峡谷づたいにアルバニア東国境に沿って南下しつづけたが、山岳にはばまれ、疲れはてドナ付近に腰を据えたようである。ここで主神ゼウスをはじめ12神の住むオリンポス山を東方はるかに仰ぎ見ながら、かなり困窮の生活を送っていたらしいが、むしろここで農耕生活から遊牧生活に移り、好戦的で強健な山岳種族となった。やがて彼らにとってこの地も狭くなったにちがいない。BC1200年頃、彼らは本土に向けて最終的な移動を開始し、原住民や先に入植してミケーネ文明を創造した同族・東方ギリシア語族まで征服し、あるいは力の及ばない遠方の地などでは両者が妥協して定着したが、その間に従来のすべての文化を崩壊し、約400年にわたる暗黒時代に陥れた。ペロポネソス南部は男女も勇猛をうたわれたドーリア人の完全な支配下にあった。オリンピアの位置するペロポネソス北西部にもドーリア語に近いオキュロスの名に結びつくアイトリア人の一帯がコリント湾を渡って遅れて入植した。古くからオリンピアはペロポネソスの総本山として神聖な場所であったから、彼らはゼウスの祭

## 古代オリンピア競技の歴史

壇で神託をうかがい、また祭礼に集った<sup>(1)</sup>。元来、オリンピアはアルカデア語系のピサ人のものであったが、その支配権が後に北方から侵入して来たエリス人と争われて祭礼の主宰権が相当に混乱している。

以下、この論文の考察は下記の順で進められている。

### I, ギリシア時代

- (1) B C 776年～B C 576年まで
- (2) B C 576年～B C 476年まで
- (3) ペルシア戦争からペロポネソス戦争まで
- (4) ペロポネソス戦争からカイロネア戦争まで

### II, マケドニア時代

- (1) フィリップとアレクサンダー
- (2) 後継国家とローマ到来
- (3) ヘレニズム時代のオリンピア祭

### III, ローマ時代

- (1) 共和制支配下のオリンピアの衰頹
- (2) シーザー支配下のオリンピア
- (3) オリンピアのルネッサンス

この論文の第一の目的は古代競技に関する権威者 N. E. Gerdiner の記念すべき著書「Olympia」に基づいてオリンピアとその祭礼の歴史を跡ることにある。ドイツ政府によってオリンピアが発掘されてから 1 世紀を迎えようとしているが、まだ我が国にはオリンピアの歴史を扱ったものがほとんど見当たらない。参考書や案内書などに立派に要約されたものは少なくないが、一般に説明が不十分であり、断片的で分かりづらい。特にヘレニズム時代とローマ時代に於けるオリンピアは注目すべきところが少ない帰もあってか、空白の状態である。そういう点に於てこの論文はその全貌を究明しようと試みている。またギリシア史に於てその関心はギリシアの東とエーゲ諸島に限定されがちであるが、オリンピアは東側と異ったものを多く持ち、オリンピアはギリシア結合の象徴である。そしてギリシア世界の独立的な都市国家の嫉妬と内訌分裂の中に発展し、ギリシア民族性の感情を受継いで来たところである。従って、ギリシアの政治、宗教、芸術などの研究に非常に重要であり、この論文の多くの考証が本質的にこれに関係したものであるから、この種の分野を研究する人にとっても、きわめて貴重な資料を提供するであろう。

(1) 工学院大学【研究論叢第 2 号オリンピア競技の起源 P 1～15.

## I

## (1)

オリンピアの主宰権をめぐるエリスとピサ間の斗争の歴史はその手掛りの多くがピサ人の権利を抹消してしまっているエリスの役人から引き出されているためにきわめて不明瞭である。しかしながら、オキエロスとその後継者イフトスが単独で競技会を司祭したという話をエリスの工作として却下できるのであるから、その聖域は元来ピサ人の手にあったことは論理的に疑うことができない。エリスとピサ間の平和はイフトスの休戦によって一時確立され、これによってエリスは祭礼に関する主宰権を得た。この聖なる休戦、Ekecheiriaという言葉がヘラの神殿に保管されていた円盤に刻み込まれた。この円盤をアリストタレスは見たというし、パウサニアスの時代までも存在していた。<sup>(3)</sup> それに関する色々な記事からその円盤にはエリス王イフトス、ピサ王クレオステネス、スパルタ王リクルゴスの名が入れられていたと結論づけられるが、スパルタはメッサニアを征服するまでオリンピアと関係づけられないし、また関係がないから、その円盤は同時代の記録とすることはできない。それは恐らくBC 7世紀に於けるスパルタ人の優勢時代のものであろう。それでイフトスの時代の頃からエリスとピサは主宰権を分担し、2人の王が祭礼を司り、この二重的な管理がBC 5世紀まで主な役人であった2人の監督官Hellanodikaiに存続されていたと推定できる。イフトスの年代についても、あるものはエリスの青年コロイボスが競走に優勝した第1回オリンピアード、つまりBC 776年と結びつけているし、他のものは第27回オリンピアード以前にその生存年代を印している通り、古代の権威者達はまちまちである。<sup>(4)</sup> この二つの年代を決定する手段はないけれど、オリンピアから発掘された莫大な奉納物から第1回オリンピアード以前より久しく聖なる場所として、恐らく戦車競走を含む祭典競技がそこではすでに行われていたと考えられる。

最初の50年の間、技を争うことは西ペロポネソスに限定されている。第11回オリンピアードまでエリスは2名の優勝者しか出していない。残る9名の優勝者はアルペイオス川流域にあるテスポニチオンから1名、アカイアのデイメから1名、メッサニアから7名と、アルペイオス川の南の位置にある。このようにアイトリア系のエリス人を圧倒していることは祭礼の初期の管理がピサ人の手にあったことを示している。第

(2) Pausanias 「Description of Greece」の4.V.8.5

(3) Pausanias V.20.及びPlutarch 「リコールゴス」の1.1

(4) 原随園「ギリシャ史研究」Ⅲ.P.256

(5) Ernst Curtius 「Olympia」Ⅳ P.39

8回オリンピックにピサは自分達の利権を取り戻そうと試み、アルゴスのヘラクレイド王ペイドンに援助を要請した。<sup>(6)</sup> この野心的な僭主はオリンピアを管理することは領土の拡張になると考え、武力を持ってエリスに侵入し祭礼を主宰した。この事実を否定することはできないし、ペイドンがBC 8世紀後半に存在したという伝承を否定する根拠もない。ペイドンの年代が正しいものであるなら、もともとヘラとゼウスの共有接合の神殿であったヘライオンの建物と彼が結びつくことも可能である。疑う余地もなくヘラ崇拜はアルゴスから来たもので、アルゴスがオリンピアに影響を与えた唯一の時期である。またペイドンが元来オリンピアになかったヘラクレス崇拜を加えたようである。ペイドンの時代の後にアルゴスとオリンピアは仲たがいになっているが、アルゴスの対抗都市スパルタの感化によるものである。パウサニアスは「ペイドンが第8回オリンピックの記録から抹殺されているから、そのオリンピックを主宰したにちがいない」<sup>(7)</sup>と述べ、ストラボンによれば、エリスはスパルタの支援を得てその権利を取り戻したのであるという。<sup>(8)</sup> しかしながら、スパルタの干渉はメッサニア征服以前に印すことが不可能であるし、これと競技記録が一致する。この征服はBC 724年に完結し、最初に記録されるスパルタの優勝者はBC 720年の長距離競走に優勝したアカンソスである。この時からメッサニアは完全に優勝者名簿から姿を消し、BC 4世紀のメッサニア再興まで再び現れない。

次の半世紀の間、南はスパルタ、東はイスマスまで拡大され、その結果イスマスを越えてアテネやテーベまで、そして海を渡って遠方のスミルナにまで及び、徐々に競技会は生長している。スパルタのメッサニア征服は南からオリンピアまでの通行権をスパルタに与え、スパルタはこの利益を受けるのにさほどの時間を要しなかった。1世紀半の間、スパルタの競技者に比するものはいない。この期間に81名の優勝者がいるが、そのうちスパルタの勝ち得た優勝者は46名を下らない。しかしながら、第50回オリンピック以後、この成り行きは突然として止っている。アリストタレスは競技に於けるこのスパルタの成功と急激な衰頹を「スパルタは真剣に競技と取組んだ最初の国家であったが、他の国家がスパルタの例に順じるようになった時、スパルタの優越性は消滅してしまった」<sup>(9)</sup>と説明しているが、その説明にはもっと深刻なものがあるはずである。150年にわたるスパルタの勢力は外的な拡大と内的な発展の時代であっ

(6) Pausanius VI.22

(7) Pausanius VI.22

(8) Strabo 「Geographica」 VIII.3.30

(9) アリストテレス「政治学」 V.4



たが、発掘資料によるとスパルタの芸術はBC 7世紀を頂点にBC 6世紀には衰頹の兆を見せている。この頃よりスパルタの拡大・発展は停滞し、偏狭的で排他的な軍主義によってその権利を固めることのみに専心したようである。

スパルタの参加が競技水準を引き上げ、オリンピアの権威を高めたことは、スパルタがオリンピアの管理上のような公的役割を持っていたか分らないけれど、監督官 Hellanodikaiの組織に同じ名称を用いている役人がスパルタに存在しているし、またプリュタネオンで歌われたドーリア的な讃歌にもスパルタの影響をうかがうことができる。恐らくこの時代までにリクルゴスが祭礼の創設に力となったことがイフトスの円盤に記録された伝承の原因を作らせたものと考えられる。

祭礼の第2番目の世紀（BC 676～576年）は植民地の参加による急速な拡大・発展を見ることができる。それは東へ、西へとギリシアの冒険者達が新天地を求めて船出した強烈な活動時代であった。BC 7世紀初頭にメガラ出身の移住者達がカルケドン、ビザンチンに植民地を建設し、カルキス、コリント、アカイア出身の移住者達は西方に偉大なヘラスを建設するためにコリント湾を出港した。

ヘラスの発展と異民族との接触はギリシア人に民族性の意識を発揚させ、民族結合の感情を湧き起したが、都市国家から成立する民族は本質的に統合されていない。民族性の概念が生えついていたとしても、民族全体が集まる場所が必要であり、民族全体が結びつく何らかの活動が必要である。オリンピアはこの欲求を充した。特にオリンピアは東西を結ぶ運河として近づき易いこと、また都市国家の分立抗争から隔絶していたことによって民族の中心地になるのに格好な所であった。その祭礼の主な特徴となった競技は本質的に民族的なものであり、民族の共通意識と分立的な都市国家間の誇りを訴えるに適したものであった。そこではあらゆる階層のギリシア人が至る所から宗教的な拘束力の下に平等な立場で集まり、個人としてだけでなく、国家の代表者として技を争ったのである。とりわけ、オリンピアのゼウスはあらゆる神々の中で最もギリシア的な神であった。実際にあらゆる都市国家では国家独特の祭礼と祭儀を持ち、それらの多くはその土地に生れ、オリンピアの神々の崇拝より先に起った原始宗教にさかのぼっている。オリンピア諸神の中でも各都市が特殊な庇護者を持っていたが、アポロ、ポセイドン、アテネ、ヘラなどはホーマーやヘシオドによって永久に決定づけられたオリンピアのパンテオンの構成神であった。このパンテオンの頭には異議なく「父なるゼウス」が立っていた。ゼウス崇拝の中にのみギリシア多神教の印象を打ち消す唯一神教の芽ばえが横っている。ギリシアの神々の中でゼウスは最も

象徴的であり、民族的なものであった。そしてゼウス崇拜の主座はオリンピアであった。

かくして、オリンピアは海を越えてギリシアの中心地になった。その中で最初の優勝者は第23回オリンピアードに於て勝を得たスミルナのオノマストスであった。次世紀にはミレトス、サモス、シラクセ、シバソス、クロトンなどの植民地から優勝者が記録されている。優勝者の同僚達は夕宴に讃歌をもってその成功をたたえた。特にパモスのアルキロコスによって歌われたヘラクレスの凱旋歌は当初のものとして有名である。第50回オリンピアード後の植民地の優勢はそれ以前のスパルタと同様に顕著なものがある。その勢力は12の宝物殿のうちで、少なくとも8個が植民地によって献造されているように奉納された宝物殿によって示されている。

一方、祭礼の重要性が育てられたことはBC 7世紀の野心的な僭主や貴族の関心を引きつけずには置かなかった。彼らはペイドンのように統治国家の輪郭を助成するために祭礼の力を利用しようとしたにちがいない。シキオンのミロンは戦車競技に優勝して500タレントに相当する宝箱と神殿を寄進し、彼の孫にあたるクレステネスはBC 572年に同じく優勝している。ミロンと同時代のキプセロスもやはり戦車競技に優勝して金板をとめて作ったゼウスの金像をたて、彼の息子もまた戦車競技に勝利を収めて有名なキプセロスの箱を奉納した。アテネの自称執政官キロンは第35回オリンピアードの短距離競走に優勝し、その少し後にメガクレスの息子アルクマイオンの戦車が優勝している。

これら二世紀の間にオリンピアはヘラスの民族的な祭礼になった。各地からあらゆる階層の人々がオリンピアに集まり、競技者として技を争うことを誇りとし、競技に出場することに魅惑を感じた。一方、競技会のプログラムは着々と加えられている。第14回と第15回オリンピアードに往復競走 *Diaulos* と長距離競走 *Dolichos* が加えられ、第18回に5種競技 *Pentathlon* が付加されているが、円盤投と槍投は別個に加えられた可能性が強い。第23回にはレスリングとボクシングが加えられたといわれるが、最初からプログラムに入っていたのではないかと思われる。同じように第25回に加えられた4頭立の戦車競走は恐らく最初から行われていた2頭立の戦車競走に代ったものであろう。第33回には競馬とパンクラチオンが加えられ、少々遅れて少年向きの競走とレスリングが第37回に、ボクシングが第41回に続々と加えられている。少年の種目としてパンクラチオンは第38回に試みられているが、何かの理由で廃止されている。これはこの競技が余り苛酷なものであると見做されたからかもしれない。少年向きの競技種目が加えられたことは教育の一部として競技訓練が非常に重要であると

いうことを意味している。

これら2世紀の間の建造物にはペイドンと結びつけられるヘライオンとBC6世紀初頭に建られたゲラ、メタポンチ、メガラの宝物殿などがある。これらはオリンピアの勢力が次第に大きさを加えていったことを説明している。プリュタネオン、恐らくボウレウテリオンもそうであろうが、確かにBC7世紀頃既に公共の建物として存在していたにちがいない。また多くの新設祭壇も増設されたと思われるが、これらに関しては何も分らない。上層から出土した奉納物はBC7世紀からBC5世紀の初頭までのものと推定されるが、これらの中で最も初期のものとされているのは幾何学的模様をした作品とオリエントの影響を受けている作品とに区別される。この二種ともBC7世紀に作られたスパルタの陶器の現われている。また幾何学的な図形をしたものには小像、銅板、とめがね、腕輪、指輪、ペンダント、ビーズ、ピンなどが含まれ、また模形車輪、シンバル、両刃おの、剣、鼎、銅器などにも見ることができる。それらの多くはギリシア、イタリア、オーストリアの各地に見られる幾何学的図形をしたものと類似しているから、オリンピアがギリシア各地の世界と接触していたことは明らかである。またBC8世紀末のオリンピアは部分的であるが、イオニアの諸都市国家やフェニキアの商人を通して完全にオリエントと接しているから、恐らくオリエントの影響は最初コリントに入り、そこからペロポネソス各地へ、そしてオリンピアに広がったものであろう。特にBC8世紀に於けるスパルタは恐らくキプロスとクレタと接してエジプトとも交渉を持っていたのであるから、スパルタがその拡大を助成したものである。

(2)

BC576年からBC476年までの25回にわたるオリンピアードはギリシア競技史の中で最も重要な時期である。競技的な祭礼は民族的な組織として認められ、民族教育の一部として競技訓練が用いられた。オリンピアの成功は多くの模倣的祭礼を生み、デルフィ、ネメア、イスマスの古い祭礼は汎ギリシア的な祭典競技として再組織された。偽政者は競技の価値を悟り、最善を尽すようにと激励し社会的・物質的な優遇を忘れなかった。ソロンはアテネの競技優勝者に価値ある賞品を提供して競技の価値を認識させた。地方の至る所に祭典競技が起り、これらのすべてがオリンピア競技のプログラムを模倣し、競技の驚くべき発達を示した。これ以前にも、またこれ以後にもこれほどまで高い水準に達することはなかったといわれるまで、競技は民族的で民主的なものになった。クロトンのミロ、カリストスのグラウコス、クソスのテアゲネスなどのように、何世紀もの間、家名を残している偉大な競技者達の大部分がこの時

## 古代オリンピア競技の歴史

代に属している。優勝者に与えられた過度な名誉はBC 6世紀を迎える頃にクセノパネスから激しい非難を受けているけれど、<sup>(11)</sup>競技の専門化や職業化の悪はまだ存在していない。この時代の競技者の多くはトレーニングに人為的な組織がなく活発な生活を送り、素朴な生活の中に生きる巾の広さを備えた良き人間であった。彼らの多くは平和時にも戦争時にも自分の都市によく奉仕していた。

この時代の典型的な競技者は記録や壺絵からも分るようにレスラー、ボクサー、パンクラチストの強い人間で、多くの物語は彼らの力技を語ったものである。その一つにビボンと名づけられる興味深い記録がオリンピアに残っている。それは143,5kgの重さに相当する赤砂土の鬼で「ビボンは片手で頭上からオフォイアスの距離以上これを投げた」と<sup>(12)</sup>刻まれている。

この時代のオリンピアの主な特徴は特にイタリーやシシリーなどの海外出身の競技者によって数多くの優勝が記録されていることである。第51回オリンピアードから第75回オリンピアードまでの25回にわたるオリンピアードに於て短距離競走は植民地出身の競技者によって17回勝ち得られている。この種目は他の競技を代表しているものとして考えることができる。あらゆる階層の人間が競技に参加していたようであるが、自由市民以外はオリンピアで技を競うことができなかった。これは競技の愛好というよりギリシア人と異国人を明確に区別するものであったと感じられる。戦車競走と競馬は貴族達が特に愛好した競技で、その中でもアテネ人はこれらの種目に卓越していた。ペイシストラトスの富豪相手カリアス、長老のミレチアデス、ステサゴラスの子キモンはこれらの馬の競技に優勝している。キモンがペイシストラトスに代理の優勝を声明させて流刑廃止をしてもらった話は有名であるが、若いペイシストラトスの名がアテネからオリンピアまでの12神の祭壇に<sup>(13)</sup>刻み込まれていることはアテネとオリンピアの密接な関係を物語っているものと考えられる。

競技プログラムの中には第65回から武装競走が加えられているが、この中に競技と戦争の間に実践的な結合を再現しようとしているのに気付く。競走は1スターデを往復する往復競走で走者は兜、脛あて、盾を装備して走る競技である。第70回には騾馬の戦車競走と騾馬競走が加えられ、騾馬競走に於ては乗手が最終回に下りて騾馬を引いて走った。これらは主に馬の養育によって富を得た地方の貴族達の興味で加えられたもので、第84回に廃止されている。

(1) K. J. Freeman 「Schools of Hellas」 P.121,122

(2) メゾ「古代オリムピックの歴史」 P.165

(3) ヘロドトス「歴史」 II・7

この時代の競技者に払われた最も意義のある名誉——優勝者への讃歌や神域内に像を立ててその成功を誉えさせる権利——が起った。これらの名誉は形式的には権威者達によって競技者に授けられたが、優勝者自身、あるいはその友人、都市などが彫刻家や詩人に委託した。しかし、公的な意見に従った事実は競技的な成功に置かれた価値が非常に高いことを示している。優勝者に対する讃歌はBC 6世紀に於てシモニデスをもって始まり、ピンダーとバキリデスで終わっているが、神域に優勝者像を立てる習慣はパウサニア人の時代まで折々続けられている。パウサニアスはそのような像を192体例記しているが、オリンピアの優勝者名簿などに著名な研究をしているウォルター・ハイデは総数500体を下るまいと見ている。像の多くは青銅製のものであるが、中には大理石や石でつくったものもある。最も古いものは木彫で、パウサニアスは第59回のボクシングに優勝したアエギナのバラキメデスと第61回のパンクラチオンに優勝したオパスのレキビオス木像2体を最も古いものと考えているが、彼は別な個所でスパルタ人ヨウテリタスが第38回（BC 628年）の少年5種競技とレスリングに優勝した時の像を述べているから、これらの像は恐らく最初のものではなく、もっと古いものがあつたと考えなくてはならない。これらの像の碑文入りの基石の多くは現存しているが、これらの中で最も古いものはBC 6世紀末を迎える頃に戦車競走に優勝したデラのパンタレスの名が刻まれている。像自体は大部分朽ちてしまい、それらの多くはローマに持ち運ばれて、大部分が青銅の値打を求めて鋳つぶされごくわずかな断片しか残っていない。

競技者像だけが神域に奉納された唯一の芸術作品ではない。オリンピアはヘレネ人の民族的な聖所であり、各種の奉納物がオリンピアのゼウスに献じられている。これらの奉納物の中には当然のことであるけれど、しばしば神自身を形どったものがある。パウサニアス<sup>(18)</sup>がこれらを具体的に選定して記述しているところによると、最も古いものはスパルタ人によって奉納された像で、BC 6世紀末に作品を作りあげたと思われるアエギアの彫刻家アリスノオスがメタポンチネスのために作ったゼウス像であるといわれる<sup>(19)</sup>。その神像は片手に鷲を持ち、他方の手に雷電を持って表わされている。雷電を浴せるゼウス像は一般的に見られるものでエリス市が建設された直後に発行された金貨にも現われている。またしばしば協作による大きな彫刻物がヘライオンや宝物殿に献じられたこともパウサニアスによって記されている。すでに3つの宝物

(14) Olympic Victor Monument P.361 (15) Pausanias V.18

(16) Pausanias V.15 (17) Olympia V.P.142 (18) Pausanias V.22

(19) Pausanias V.22

殿が存在していたけれど、キレネ、シバリス、ミサニチン、セリノウス、エピタムノスなどの5つ以上の宝物殿はBC 6世紀後半に建られている。それはオリンピックに対する植民地の熱狂的な関心を示したもので、これらの宝物殿は公共の建物として部分的に予定され、それを奉納した都市は民族的な聖所と祭礼に永久に神聖な位置を確保しようと努めたと考えられる。さらにオリンピックへ条約、協約、法律などの記録を供託する習慣がBC 6世紀頃すでに行われていたということが碑文から知ることができる。<sup>(20)</sup>

(3)

BC 6世紀以前のオリンピック管理に関してほとんど知るところがなく、それは地方的なピサ人の手にあったと仮想する以外にない。しかし、神聖と威厳の急速な生長は一層明確な組織を必要とし、規則を変えるに必要な集会や会議がもたれたことがBC 6世紀の碑文には述べられている。<sup>(21)</sup> 会議の主な任務は新しい建物や記念建造物の建立を計ることと競技会プログラムの作成で、こうした会議には永続的な本営が必要となり、パウレウテリオン（評議館）の北翼はそのためBC 6世紀半ばに増築された。2人の監督官がその執行官として業務を遂行していたと思われるが、ある碑文によると1人の監督官がそこで働いていたという。<sup>(22)</sup> しかし、この時代に於て1人の監督官ということとはあり得ない。記述に出てくる他の役人は *Iaromaioi* <sup>(23)</sup> で、恐らく聖域の財産管理をしていたと考えられる。テオコロス *Theokolos* は供儀の管理を司っていた。テオコロス *Theokolos* の分限と財産保証に関する碑文によれば、そのような保護は立法的な利益までに拡大すべきではないと与えられているから、この役を司る役人は役職から利益を得ていたのではないかと疑える。

エリスの封鎖的で保守的な貴族は会場を建立する以前のオリンピックの発達に何の働きもしていない。実際の発達は外部からの方が多大であり、エリスの寡頭政治は全く反映していない。ペルシア戦争という民族的大事件時にエリスは全く冷淡な態度を取っている。エリスの分遣隊はプラタイアニーの開戦に参加するのに余りにも遅れて到着し故国に戻って恥と民の怒りをかい、そのためエリスは寡頭政治を排して民主主義を確立したといわれる。

政治変化と共にオリンピックは必然的にその巻き添えに会い、第75回オリンピックードには2人の監督官 *Hellandikai* は9人の評議官に置き代った。パウサニアスによれば、彼らは3つのグループに分れて戦車競技、5種競技、その他の競技というように

<sup>(20)</sup> Olympia V. 2, 4    <sup>(21)</sup> Olympia V. 30    <sup>(22)</sup> Olympia V. 2

<sup>(23)</sup> Olympia V. 1, 4, 10

その担当を託されたという。一説に従うと、それはエリスの部族の数に由来しているといわれる。これと同じ頃に民主々義的な姿の現われともいうべき陶片による選挙 Ostracism が行われるようになり、ピサは管理主宰権の多くを失った。BC 471年新しく建設されたエリスの都市に政治的な中心地が移動することによって、その不満は急増し、その結果ヘロドトスによって記録されている暴動が勃発した。<sup>(24)</sup> エリスはピサとトリフィリアを打ち倒し、<sup>(25)</sup> これらの都市を吸収し征服地を代表する1人の監督官を加えて10名の監督官を設けた。

エリス人はオリンピアの庇護者として生じる利益を十分に悟り、民族的な大神聖を新しい都市と同一視しないで、神聖な境内にある神殿とその領地を当然の権利として考えていた。エリス人の都市は次第にオリンピア管理の恒久的な本営になり、祭礼に関するすべての事柄はエリスだけで押し進められた。<sup>(26)</sup> アゴラ（広場）の近くにあるヘラノデケイオンという建物では抽籤によって選出された監督官はノモフィラスケス Nomophylakes という指導官の手で必要な訓練を受けた。競技者もまた監督官の監視の下にエリスで最終的な訓練を受けて競技会の始まる前の1ヶ月を費した。そのため走路とレスリング場を備えた3つの体育場 Gymnasion が提供され、アゴラ自体はヒッポドロム Hippodrome（競馬場）と呼ばれ、乗馬や競馬を練習するのに使用された。しかし、そこはゼウスやその他の神々のわずかな祭壇を除いて装飾のない柱廊によって取り囲まれた空地でしかなかった。またオリンピアのヘラ祭ではギリシア婦人の着る上衣の一種・ペプロスが寄贈されたが、これを織る16人の婦人寮がアゴラの近くに置かれた。エリスとオリンピアを結ぶ聖道がしかれ、トレーニングを終えるとこの聖道にそって監督官を先頭に競技者、トレーナー、馬と戦車の集団が物々しい行列を作って祭礼に向った。これらの手筈が何時頃より加えられたか分らないが、エリス人のかたどる政策がこの頃より日付けられることは確実であり、祭礼の事柄がエリス人の管理の成功を証言している。そのためにエリス人が単独支配を獲保した時は妙に機宜を得たところがある。

ペルシア戦争は汎ギリシア競技と競技会全般に力強い衝動を与えたが、ギリシア人がこの戦争から引き出した主な道徳律の一つは体育場 Palestra で訓練された兵士達が女性じみたオリエントに優勢を示したことである。あらゆる都市が都市独自の競技場、体育場、運動場を持ち、盛大なる民族の祭典が全ギリシア中の世界から拔擢さ

②④ ヘロドトス「歴史」Ⅳ.148

②⑤ ピサの崩壊年代はドップフェルトによると第50回オリンピアード頃という。従ってこの頃まで名目上支配権を分割していたと思われる。

②⑥ Pausanias Ⅵ.5

れた競技者を引きつけ、あらゆる種類の名誉が惜みなく与えられた。詩人は優勝者に勝利への讃歌を送り、彫刻家は優勝者の姿を不朽に刻みつけた。そのためにBC 5世紀の最も高尚な競技理想を大いに賞讃するものが芸術の中に吹き込まれている。<sup>(27)</sup>

この時代のオリンピックの性格と広さの概念はテμισトクレス自身がオリンピックを訪れて競技者よりも熱狂的な歓迎を受けたペルシア戦争後の第75回オリンピックの優勝者名簿から形づけることができる。その名簿はパピルスの写本となって保管されているが、少々複雑である。短距離競走はミチレネ出身の走者が優勝し、往復競走はシモニデスの散文に書かれているアルギネ人が優勝し、長距離競走と少年の競走はスパルタ人がそれぞれ優勝している。5種競技の勝者は禁欲と厳格なトレーニングを行った例としてプラトンに引用されているタレントムのイコスである。<sup>(28)</sup> レスリングとボクシングはイタリアにあるロクロイのヨウチモスとタソスのデアゲネスの有名な競技者がそのピタゴラスの手によるものであり、デアゲネスの像はアエギナのクロウキアの作である。少年種目のレスリングの勝者はアエギナ人で、恐らくピンダーの第8歌「ピチアの讃歌」に述べられている優勝者だろう。彼もまたオリンピックに像を立てている。ピンダーはこのオリンピックの優勝者に現在分っているだけでもイタリアのロクロイ出身で少年のボクシングに優勝したアデンダモスのために二つ、戦車競走で優勝したフトラガスのテロンに二つ、競馬に優勝したヒエロンのために一つと、少なくとも五つの讃歌を書いている。彼の第1歌にはペロップスの物語が述べられ、第3歌と第11歌にはヘラクレスによって創設された競技会について語られているから、これらの歌の中に彼は優勝者を誉めるよりオリンピックの栄光に多くの関心をよせていたと思われる。ヒエロンの優勝はまたバキリデスによってたたえられ、後に彼の息子によってヒエロンをたたえる戦車団が設立されている。しかし、この盛大なオリンピックに於てさえ、競技の中に過度な危険がはらんでいるのに気付く。武装競走は以前にオリンピックで優勝したことのあるクロトンのアスチロスが勝を得たが、この時、彼はヒエロンの特別なもてなしを受けてシラクサ人として参加している。これは競技者を売却した最初の記録例である。怒った彼の郷里の人達はアスチロスの名誉をたたえて立てた像を引き倒し、彼の家を囚人の拘置所にしてしまったという。

間もなくして新しい管理の力がオリンピックを変化させているのが感じられる。これまでも個々の都市は宝物殿を建てることによって特権的な地位を傲慢にも名のるよう

② Gardiner 「Athletics of the Ancient world」 P.55~58

② Platon 「プロトゴラス」 316d. Pausanias V.10.5

② Bacchylides,, V. Pausanias V.12.1



になっていたが、BC480年と470年の間に三つの宝物殿が加わっている。そのうちの二つはシラクラとシキオンの住民によって建られたが、もう一つは分っていない。恐らくエリス人によって寄進されたものであると考えられるが、もしそうだとすれば、この時代からエリス人が神域の建物を自分の手の中におさめていたことを証明している。

(4)

ペルシア戦争(BC490~479年)とペロポネソス戦争(BC431~404年)の間の年はオリンピアの歴史の中で最も才気煥発な時期であった。しかし、ギリシア結合の夢はほんの束の間のことでしかなかった。BC5世紀中期前に古くからの反目が再び突発し、1世紀以上の間ギリシアはマケドニアの権力によって統合されるまで対抗都国家間の争いで分裂していた。オリンピアもこれらの戦禍から免れることはできなかった。聖なる地域は再度の侵略を受け、建築活動は中止せざるを得なかった。競技に於ても他の場合と同様に顔廃と墮落の跡がうかがえる。しかも、祭礼の価値は決して目立ったものでなかった。一般的な腐敗・墮落にもかかわらず、オリンピア競技の高度な伝統は維持され、オリンピアのみがギリシア同胞意識の理念を生かし続けていた。

「ヘラクレスが祭典競技を創設したのはギリシア人がオリンピアに集まればその中にはお互の友情が芽ばえたと考えたからである」とオリンピアコスの中でリシアスがいのようにオリンピアは疑いもなく善隣交友を促進した。聖なる休戦は少なくとも戦争に短期の休息を与え、祭礼への往復の途上は安心して旅することができた。イソクラテスの言葉を借れば「彼らは互に神酒を注ぎ会って、自分の敵をうやまい、公的な祈禱と供儀によって結ばれた<sup>(30)</sup>」といわれる。このようにして互に親しくなることを学んで共通意識を持ち、旧交を暖め新交を作ったのである。

オリンピアの政治的な価値は条約の締結に認められるが、条約と休戦の布告、記録、裁可のためにオリンピアほど便利な場所ではなかった。BC445年のスパルタとアテネ間に結ばれた30年間の休戦条約が神域の石碑に記録されている。BC421年のニキアスの講和もそうであるし、その翌年に結ばれたアテネ、アルゴス、マンチネア、エリス間の100年条約を同様である。100年条約の場合にはオリンピアと汎アテネの祭礼で定期的に条約条項を書き換えなければならないということが記録になっている。<sup>(31)</sup>

ギリシア人は公衆の意見に対して非常に感覚的であったから、これらの民族的な祭礼に於てのみギリシア世界の結集した意見を意識させることができた。それ故、都市

<sup>(30)</sup> ②② Isocrates 「Panegyrikos」 C .43.

<sup>(31)</sup> Pausaius V .12.8 ,23.4 Thucydides V .18.47.

と立法家達はオリンピアで大衆の支持を得るために無上の重要性を執着させて、戦車競走に惜まず経費を使っている。アルキビアデスは莊嚴な戦車によって公的な仕事に報い、アテネの栄光を高揚したことが論じられている。<sup>(32)</sup>これと反対にデオニシオスはオリンピアで輕蔑と侮辱を受けて失望した記事がデオドルスによって与えられている。<sup>(33)</sup>メッサニア再興に抗議しているアルキダモスに口添えをしたイソクラテスの言葉を借りると「スパルタ人はオリンピアで今まで賞讃と善望の的になって来たが、我々の誰かがそこで自分自身を大胆に見ようとするならば、名誉の代りに侮りをかい、勇氣に対する人気者の代りに憶病者としてなおざりにされ、奴隷同然となることを覚悟しなければならぬ」<sup>(34)</sup>ということである。

オリンピックに関する見解の重要性は汎ヘレニズムと自律性の対立理想が同調しているところにある。ペリクレスの夢みた帝国の失敗は都市国家が自律性をもっていて同じくないという事実によるものである。しかし、オリンピアでは二つの理想の間に何の衝突も起きていない。従って、都市国家の代表者として国家のために勇敢に技を争っているし、ペロポネソス戦争の開戦時にはミチレニアの使節が都市国家の自律性の名の下でアテネの僭主に抗議するためにオリンピアへやって来ている。またその後、アテネとスパルタがペルシアの陰謀で反逆的になっていたとき、民族的な統合の必要性がオリンピアで3度ほど叫ばれている。

第1回目の声明はBC 408年の祭典でレオンチニのゴルジアスによつて行われた。内訌分裂しているギリシアを見た彼は異国に対抗できるギリシアに戻ることを呼び求め、「都市国家を戦争の賞品とすることをやめ、バルバロイの土地を賞品とすべきである」<sup>(35)</sup>と扇動し、ギリシア統一を訴える勧告者になった。BC 384年にはリシアスの「オリンピアコス」が演説された。<sup>(36)</sup>これにより2年前のギリシアはアジアの自由ギリシア都がペルシア大王の配下に置かれ、ペルシアの裁定によつて屈辱的な平和を受けた。この講和裁定によつて全ギリシア都市に対するスパルタの覇権が承認され、スパルタはマンチネアを吸収して他の自由地域の対抗国シラクセの僭主デオニシオスと同盟を結んだ。このデオニシオスは国威発揚を企てオリンピアに弟のテアリデスに引率させて莊嚴な使節団を送った。金糸を織り混ぜた豪華さん然とした絨毯を敷いたテントを神域内に張って、デオニシオスの名で立派な戦車を入場させた。また熟練した叙

<sup>(32)</sup> Thucydides VI.16 Tsokrates 「De Bigis」, 32

<sup>(33)</sup> Diodorus XIV.199 Grote 「History of Greece」 133.

<sup>(34)</sup> Isokrates 「Archidamos」, 95.

<sup>(35)</sup> 村川堅太郎「オリンピア」P.187ゴルジアルはオリンピアに像をたてられ尊敬された。

<sup>(36)</sup> メゾ「古代オリンピックの歴史」P.220～221

事吟唱家達はデオニシオスの作った詩を群衆の面前で歌うために雇われた。しかし、この虚飾はすべて怒りとあざけりを買うだけで、これらの感情はプログラム最初の種目である短距離競走の優勝者デコンがデオニシオスによって崩壊された自由都市カウロンの住民であるのをシラクセ人と通告された時に増大した。こうした状況の下にリシアスの演説が行われたのである。リシアスはまずギリシアの敵はアルタキセルクスとデオニシオスであることをギリシア人に戒告してから、「不敬虔なデオニシオスの使節をこの神聖な競技会に入場させることは許されない。デオニシオスの豪華なテント一杯に蓄えてある高価な財宝を略奪せよ」と煽動した。祭礼の歓待で侮辱はもちろん禁じられていたが、観客達はデオニシオスの雇った吟唱家達をあざけってその感情を爆発させ、デオニシオスの戦車が不幸にも転倒したのを見て満足したという。

4年後、イソクラテスは全ギリシアが争いを止めて団結しペルシアと対抗するようにアテネとスパルタに訴えたパンフレット「パネギュリコス」<sup>(37)</sup>（大祭演説）を祭礼で配布した。

これらの演説の中に初期の少々莫然としたヘレニズムが実際的な形を取って明確に現われたようである。紛争と反目を持った都市国家は互に分裂し、同盟を結ぶという形で新たに統一を求める要求が湧き起った。すべてのギリシア人は同胞意識を感じ、同胞の間に戦争することは誠に不自然であったので、ある都市国家が他の都市国家を征服しても凱旋を祝う記念建造物はBC 4世紀に入ると見られない。この感情の生長はオリンピアで跡をすることができる。BC 6世紀の末期頃にスパルタはある凱旋のための感謝物として3.4mのゼウス像をオリンピアに寄進した。パウサニアスはこれを第2次メッサニア戦争の勝利と結びつけているが文章の意味から押しても誤であることが分る。<sup>(38)</sup>とにかく、それは同胞ギリシア人に打ち克った勝利であったことには間違えない。同様にコリント、アルキブ、アテネ、イオニアからの戦利品でゼウス神殿の東の切妻の上に楯を納めてタナグラの凱旋を記念した。<sup>(39)</sup>しかし、これに対する抗議の言葉を全然耳にしないし、またBC 420年頃にメッサニアは敵国を降した勝利を記念してパイオニオスのニケ像を作った時に何の抗議もなされていない。しかしながら、数年後にアギスが神託を伺にオリンピアへやってきたとき、エリス人は「神託はギリシア人との戦争の与えるべきでない」と古代の伝承を引き出して彼らの戦勝祈願を禁じ<sup>(40)</sup>究極的にはピサの失敗に終った反抗後のBC 364年にエリスは「和を取持つエリス」<sup>(41)</sup>

③⑦ 村川堅太郎「オリンピア」P.190 ③⑧ Pausanias V.24.3 Olympia V.252  
③⑨ Pausanias V.10.4 ④⑩ Xenophon 「Hellenica」 III.2.22 ④⑪ Olympia V.260

と祭礼の理念に即応した碑文を刻んだ巨大なゼウス像を立てている。

エリスはペロポネソス戦争の勃発頃からスパルタと犬猿の仲になっている。エリスは絶えずスパルタの嫉妬とピサ及びその近親国であったアルカデアの不满による二つの困難と斗わねばならなかった。エリスがスパルタと遠隔になったのはエリスのシノエキスモス（集住）と寡頭政治の転倒によるものと思われる。スパルタはオリンピアの生長に共なう重要性が新しい民主主義的な独立を獲得してゆくのを無頓着で見ることができなかった。さらにギリシアの汎ヘレニズムがペロポネソスを越えた思想を持たなかった偏狭的なスパルタ人の心にとらえられなかった。一方、外部に目を向けたアテネ人はオリンピアの理想に密接に同調した。オリンピアの芸術的な活動はエリス人が生じせしめたことも事実であるが、ギリシア芸術活動の中心地でスパルタと陰悪な対抗国であったアテネやアルゴスと多くの接触を持つたエリスを引き出さざるを得ない。それ故、エリスは名義上ペロポネソス同盟の一形成国であったけれど、スパルタを本腰で支持していない。

レプレオンに関する口論は公然とした反目である。<sup>(42)</sup> BC 420 年にレプレオンはアルカデア人との戦の際にエリスに援助を求め、その返礼としてゼウスに納めるべき年 1 タレントの貢物を拒んだためにエリスは取立てを強行した。レプレオンはスパルタに助けを求め、スパルタは 1000 人の重装歩兵を至急派遣した。この時がちょうど第 90 回オリンピアードの開催直前の聖なる休戦 Ekecheiria の期間であったので、エリス人はオリンピアの休戦を犯したとして 2000 ミナイの罰金をスパルタ人に賦課した。スパルタは休戦の布告がまだ届いていないのを口実にしてこれを拒んだため、エリスは供儀と競技からスパルタを締め出してしまった。このように大胆な働きかけをして彼らはアテネとアルゴスと 100 年条約を締結したが、そのため、スパルタがおとなしくその除名を受け入るだろうかと、祭礼の不安は大きくなった。かくしてスパルタの侵入を恐れ、武装した若者が神域を守り、同盟国アテネ、アルゴスの兵士に見守られながら祭典は開らかれたが、さらに悪いことに競技会が開催されて、競技会から締め出されたスパルタ人のリカスはボイオテア人の名で戦車競走に出場し、これに優勝した。優勝が触れ人によって通告されたとき、彼は自分の戦車に近づいて御車に冠を与え、馬主はスパルタ人のリカスだと御者に告げさせた。審判ヘレノタミアイの下には競技者を打つことを許されたラウドコイ（棒持ち）がいたが、リカスはたちまちこれに打たれて恥をさらした。この冷たい侮辱にもかかわらず、スパルタは何の手出しもせず、祭礼

(42) Thucydides V .31.49 古代オリンピックの歴史 P.66 「2000 ミナイで 6600 頭の牛が買えた」

は無事に終了した。しかしながら、100年条約は1年しか持たず、マンチネイア戦争後にエリスはスパルタ同盟に戻っている。

しかし、スパルタは次のBC 416年のオリンピックに於てもまだ謝罪していない。この第91回オリンピックでアテネのアルキビアデスは7台の戦車を入場させ、1着、2着、4着を勝ち得て、この競技に参列した観衆全部を招待した。<sup>(43)</sup>この宴会の費用はアテネと同盟を結んでいたエペソス、キオス、レスボスなどの富豪都市から支援されたといわれるが、彼はアテネ人の光栄を見せしめてペロポネソスの都市国家と同盟を結ぼうとした。ペロポネソス戦争後、スパルタはエリスに使者を送って、戦費の分担金の支払とエリスの従属都市であったアルカデア、トリフィリアなどの独立を要求したが、エリスはスパルタがギリシアを隷属化しようとしているとこれを逆襲したため、スパルタの僭主アギスは憤慨してアカイアから一軍を率いてエリスに侵入しエリス各地を荒し回った。しかし、天佑の地震によって迷信深いスパルタ人は退却せざるを得なかった。翌年、スパルタは同盟国から援兵を補強して再び南から進撃したがクセニア人やピサ人の援助にもかかわらず、スパルタのエリス攻略は失敗し、アルペイオス川を渡って退却した。次の年のBC 399年、エリスはキレネとペイアの城壁を取り去ってトリフィリアとアルカデアの独立を承認して屈服した。ピサ人はオリンピックの主宰権を要求したけれど、オリンピックの主宰権はエリス人に残された。<sup>(45)</sup>

エリスの従属的な感じが間もなく競技会に現われている。BC 396年の競技は地方的なエリス人が6種目も優勝するほどまでに落ちぶれている。この年に触れ人とラッパ手の競技が加えられているのは競技的な関心を失った埋め合せである。不正行為もこの時代になって始めて現われて来ている。第96回オリンピック(BC 396年)に3人の決勝審判のうち2人が競走競技でエリスのヨウポレモスの勝ちを判定し、1人がアムブラキアのレオンの勝ちと判定したため、レオンは評議会に控訴し、その上訴が認められた結果、審判官は罰金を課せられるという不祥事が起った。<sup>(46)</sup>同じような不祥事がBC 372年の競馬競走にも起っている。勝者自身が審判官であったために問題になり、その結果、戦車競走と競馬競走に審判官は参加してはならないという規則ができた。<sup>(47)</sup>また自分の故国から他の都市に移籍して優勝を身売りした競技者がいた。<sup>(48)</sup>BC 388年にシラクサの僭主デオニシオスはミレトスのクレイノパトロスに贈り物を送って、少年のボクシングに優勝した彼の息子アンチパトロスをシラクサ人として通告

④③ Thukydides VI.16.2 メゾ「古代オリンピックの歴史」P.185

④④ Xenophone 「Hellenica」III.2.23 ④⑤ Pausanias V.4.8, 27.11, VI.2.8

④⑥ Pausanias VI.3.7 ④⑦ Pausanias VI.1.4 ④⑧ Pausanias VI.2.6, 18.4

(49)  
 させようとしたが失敗に終わった。8年後の第100回オリンピックにはエフェソス市がクレタの長距離競走の優勝者ソタデスを金で買収し、エフェリス市民として勝利を宣言させた。このためにクレタ市は追放をもってこの不信な競技者を罰した。このような競技者の身売りは現代のプロ野球の選手がある球団から他の球団へ金によって移籍するのと類似したところがある。競技が目的であれば、それは不名誉なことではなく、競技者自身の故国に対してただ失礼な行為で、オリンピックの権威には何のかかわりもなかった。しかし、競技者自身が身売りして敗けた場合は異っていた。これはオリンピックのゼウスに対する侮辱であり、そのような場合には罰せられた。この種の罰はBC 388年に始めて行われている。テサリーのヨウポロスがボクシングに勝とうとして相手の競技者を買収したが、八百長試合が見つかり、罰金を課せられた。この罰金から「ザネス」と呼ばれるゼウスの銅像6個が造られ、その台の碑文には「オリンピックで勝ち得る賞は金でなく、足の速さと支肢の力で得なければならない」と刻まれ、ヘラの母神殿 Metroon と競技場の人口の間に置かれた。同様な罰はBC 332年まで行われていない。オリンピックの全歴史を通してそうした例はごくわずかである。ヘレニズム時代やローマ時代に於てさえ、オリンピックでは競技的名誉の水準が高度に維持されたことは祭典競技の注目すべき特徴の一つである。従って、オリンピックの光栄の失墜は一時的なものである。

BC 371年にスパルタの権力がテーベの智将エパミノダスによってレウトラで打ち砕かれ、エリスはトリフィリアの諸都市を再び手の中におさめた。同年、汎アルカデア同盟を動かすテーベの下に首都がメガロポリスに置かれ、新しい共有財産の硬貨には同時代のエリス貨幣と非常によく似たオリンピックのゼウスが刻まれている。

BC 368年、再びスパルタはテーベの覇業をねたんだアテネと連合軍をつくり、テーベに対戦したが、このマンチネアの戦でも打ち敗れた。この時より農奴的な立場にあったメッサニアは自由を回復し、イソメ山の足下に新メッサニアを建設した。メッサニア人はオリンピックの初期には顕著な働きを演じたが、3世紀の間、メッサニア人は競技の優勝者を出していない。メッサニア再興後の第1回目のオリンピックにはメッサニアの少年タミスユスが優勝している。

しかしながら、スパルタの衰頹と共に新しい不安が湧き起ってきた。エリス人が祭礼の権限を主張する機会からトリフィリア人を締め出してしまったから、トリフィリア人は不満を持ち、ピサはオリムピック競技の主宰権を再び取り戻す希望を抱いていた。そのために双方ともアルカデア人に援助を要請した。エリスが国境の隣接都市ラ

シオンを手におさめたBC 365年にアルカデア人はその援助をためらい、逆にオリンピアへ兵を進めてクロノスの丘に守備隊を駐屯させた。次の年の祭礼をアルカデアはピサと共に開催することにし、そのためにアルゴスや遠くアテネの武力援助を求めている。祭礼の第1日はことなく終わったが、第2日の戦車競走がすみ、観衆が祭壇の前の空地でレスリングの試合を見ている折、エリス軍がクラデオス川の彼方に現われ、勇ましく攻撃しかけてきた。彼らはアルカデア人やアルギブ人を押し返して神域の中までなだれ込んだが、アルカデア人は建物の屋根から石を雨の如くに降らせてエリス軍を撃退し、神域はエリス人の再来に備えて防柵で護られ、とにかく祭礼は終わった。

ピサの凱旋は長く続かなかった。ギリシアの宗教的な感情はオリンピアの武力による占領と聖なる休戦の不履行によって無残にも踏みにじられ、アルカデア人が傭兵の賃銀を支払うために聖なる宝物殿に手をつけたので、ことさらに世論は沸き立った。BC 362年にエリスとアルカデアの講和が締結され、エリスは再びオリンピアの支配を取り戻し、第104回オリンピアードは優勝者の名を記録簿に残したけれど、「無効<sup>(49)</sup>オリンピアード」と宣言している。

## II

### (1)

オリンピアは長期に渡ってマケドニアの王を上訴している。BC 6世紀にアミンタスの子アレクサンダーが競技に参加する権利を得たとき、正式にヘレネ人として認められ、一世記後にヘルデカスの子アルケオスが戦車競走し、アカイアでマケドニア人のオリムピックを開催して帝国時代に順じる一例を置いた。

フィリップとアレクサンダーもヘレネ人として十分な承認を受けなかった。彼らは統一されたヘラスの指導者としての姿勢を取り、異民族との融合を計った異国の擁護者で、彼らの政策上、民族的な神聖を支持することはきわめて重要なことであった。彼らはギリシアに首都を設置する必要性を感じ、オリンピアをそれに適した場所であると考えた。デルフィは贈物を受けてヘレネ人や異国人にその解答を与えるという世界主義的なものがあったが、その神託はペルシア戦争に大きな役割を演じた一般人から政治的な陰謀や党派心によって信用されなくなっていたため、デルフィのピチア祭は神託に於ても全く第二次的なものとなり、オリンピアとは比較することはできなかった。オリンピア祭は非常に重要視され、排他的でギリシア的なものを持っていたので、その本質となった中立性が民族の結合に役立った。オリンピアのゼウス宗教神に

(49) Anolympiad は第34, 第104, 第211回の3回である。

全ギリシアは固く結ばれ、オリンピック競技は民族的な教育の役割を果し、その記念建造物や建築物は何時如何なる場所のギリシア人の敬虔を立証している。とりわけ、その特殊な位置と伝統、政治的な結合の具現をはばむ衝突力、対抗都市の反目と分立抗争はオリンピックに見い出すことができない。従って、ギリシア統一を計ったマケドニア人やローマ人はオリンピックの重要性を理解し、これを利用している。

フィリップはオリンピックへの関心を示すためにBC 365年に戦車競走に出場し、これに優勝している。彼はシシリーの僭主に順じて貨幣に自分の戦車を刻んでオリンピックでの勝利を記念した。このようにして得た特権は疑いもなく、彼がペロポネソスを陰謀で手に入れるのに役立っている。聖なる戦争でデルフィ人を援助してピチア競技の司祭者となっているように、これらの陰謀は非常に分りづらいが、明らかに賄賂的な援助によってエリスをマケドニア化しようと努め、またカエロニア戦争直後にはスパルタを除き屈服したペロポネソスを行進している<sup>(1)</sup>。BC 337年にエリスでギリシア都市国家の会合を召喚し、そこでベルシア撲滅の氣勢をあげ、ギリシア軍の総指命令官に選出されている。この年に彼はオリンピックで唯一の記念物であるフィリップペイオンの建造に着手している。フィリップは実際に指揮を取らぬうちにエペイロスのアレクサンダーと自分の娘クレオパトラの結婚式を挙行したアイガイで暗殺された。彼の死によってエリスを含めた合同的反乱が起ったが、アレクサンダーの活発な働きによって反乱は鎮圧された。ペロポネソスは屈従し、追放を受けたマケドニアの遊撃兵は再び権力を取り戻した。

アレクサンダーが個人的にオリンピックを訪れたかどうかは分らないが、フィリップのように競技会に馬と戦車を送るという自己宣伝的なことはしていないから、まして競技に参加するということはないだろう。プルタークの物語の中には少年時代に暴れ馬に乗って人々を驚かせたことや鎧のない馬で敵の大軍と奮戦していることが描かれているから、スポーツ的な素質はよほど高ったにちがいないが、同僚から何故競技に出場しないかと問われて、彼は「競技者としての王ならばそうするだろう」と答えているから、競技の民主々義的な性格に妥協することができなかったようである。さらにアレクサンダーは自国の野外スポーツが軍事訓練として下位にあると考えていたけれど、その当時、高度に専門化されていた競技に対して同情的でない。彼の出征中、アジア人を含めて各地で競技会を開催しているが、競技会より音楽的で劇的な競演や見せ物、野獣狩を一層重要視して行っている。しかしながら、彼は民族的な祭礼の政治的・社会的重要性を熟知し、それを利用することは心得ていたようである。

(1) Pausanius IV.28.3



そのために彼はイッソスの戦い（BC 333 年）でペルシア側の傭兵として戦ったテーベはデオニソドロスを捕虜にしたとき、かつてオリンピアの優勝者であることを知<sup>(2)</sup>って自由を与えている。このように彼はオリンピアを懐柔し、ギリシアの首都と考えていたから、彼の出征と凱旋の布告はオリンピアの記録簿にとどめられ、オリンピアで公にされた。BC 324 年、当時ギリシア都市国家の分立抗争の結果生じた亡命者が大きな社会問題となっていたが、それを故国に復帰させ、彼自身の神性をギリシア人に承認させる布令を宣するために使者ニカノルをオリンピアへ送っている。この亡命者復帰令は第 114 回オリンピアードの開催時に行われたが、噂をきいて集った亡命者が 20,000 名以上いたといわれる。この数は集合した群衆の規模・概念を考える上に貴重である。

この時代の名誉像は特に変化に富んでいることで興味がある。フィリップとアレクサンダー、その将官アンチゴノスとセレウコスを表わした群像がエリス人によってオリンピアに寄贈されている。<sup>(3)</sup> 哲学者アリストテレス、歴史家アサキメネス、それから外国人傭兵長であったアブデラのピセス像がある。アサキメネスとピセスを誉えた像はリシポスの作であるといわれ、ピセスの像は彼の兵士達によって奉納されたものだといわれている。

アレクサンダーと関係のある像の中で最も興味深いものは彼の東方出征の際にその道案内人を務めたピロニデスによって奉納されたものである。<sup>(4)</sup> この像の碑文が 2 個発見され、像を支える台座の基礎石がアルチスの南西の端で発掘された。この碑文には「道案内人の役目は行進する行程を測定し、地図に記録することである」と書かれているが、碑文の書かれている台の一個には恐らく銅の羽目板をさし込んだと思われる形跡がある。クルチウスは「この羽目板にはアジアの地図が描かれていて、オリンピアを訪れる人々はアレクサンダーの出征をその地図によってたどることができた」とも<sup>(6)</sup>っともらしい想像を巡らしている。

(2)

アレクサンダーの死後、帝国の分裂はさげがたく、帝国はその部将を後継君主 Diadochoi とする王国が生まれ、<sup>(7)</sup> 戦乱の世の中になった。エリスは再び反乱を起し、マケドニアの権力に屈服しなければならなかった。この時からローマによるギリシアの最終的な征服までエリスはギリシアを乱す対抗都市と同盟国との陰謀や戦争に巻き込ま

(2) メゾ「古代オリンピックの歴史」P.209 (3) Pausanias VI.11.1

(4) Pausanias VI.4.8, 12.2 (5) Pausanias VI.16.5 (6) Olympia II. P.129

(7) BC 3 世紀の頃から北方のマケドニア王国、アジアのシリア王国、エジプトのプトレマイオス王国のヘレニズム三君主後継国家ができた。

れた。2世紀中期に書かれたポリビオスの本はオリンピックの神域が戦争によって平和と自由を喪失した愚さを講話にもじったものである。<sup>(8)</sup>彼はまずエリス人の武器に頼ったアルカデア・ドラシオンの争いに話を戻してその変化の跡をたどっている。そして彼らを平和な方向に戻し、前のエリスの権利を回復させるためにはローマが征服の機会を捕えぬ限り不可能であると考え、エリスに中立を保つようにその史書で忠言している。確かにヘレニズム時代に於けるエリスの領土は神聖にして犯すべからざるものではなくなっていたし、オリンピックさえ戦禍から免れることはできなかった。BC 312年にアンチゴノスの謀叛將軍テレスホロスがエリスに駐留し、オリンピックの宝物殿を荒した。その後、アンチゴノスの甥に当たるプトレマイオスによって追放され、宝物は神殿に返還された。<sup>(9)</sup>1世紀後にスパルタの僭主マケニダスは祭礼時のオリンピック攻撃を計画したが、フィリップV世によってじくかれた。<sup>(10)</sup>このようにエリスは幸福な運命をつかんでいるが、オリンピックの神域はみごとに宝物によってエリスの援助を得ようとする国家から重じられた。

ヘレニズム時代に関係したオリンピックの歴史を書くことは不可能に近いが、その繁栄ぶりを新しい壮麗な建物から明らかにする以外にない。不幸にもこれらの建物の年代や建立状況に関して知るところが少ない。従って、優勝者名簿や名誉像から証拠の裏づけをせざるを得ない。この時代の著しい特徴の一つは名誉像の数が増えていることである。資料が不十分であるけれど、ギリシア世界の対抗国王と同盟に関連した競技の性格とオリンピックの関係概念をある程度形成することができる。特にオリンピックの記録簿が今まで以上に価値あるものとして顕著に求められる。<sup>(11)</sup>それは断片的であるけれど、優勝者名簿が如何にアレクサンダー没後の世界変化を正確に写しているかを見ることができる。

過去のスパルタ、アテネ、テーベなどの大都市国家は競技から全く姿を消し、これらの大都市国家に代ってエリス、アルカデア、アカイアなどの都市が台頭して来ている。これらのエリス、アルカデア、アカイア出身の庸兵が東方から富を故国へ持ち込んだことが、奉納された像の数に現われている。特に注目すべきことはエリス出身の優勝者の数である。この時代にパウサニアスによって記録されている32体の像のうち、<sup>(12)</sup>15体はエリスの優勝者像である。オリンピック歴史の初期の一部に突出した役割を

(8) Polybios 「Historica」 IV.73.74 (9) Diodorus XIX.87

(10) リヴィウス「ローマ史」28.7

(11) 優勝者名簿はBC 5世紀にヒッピアスによって始められ、その後アリストタレス、エラストテネス、チマイオス、ヒロコロス、フレゴン、アフリカヌスなどに引継がれた。

(12) Hyde P.75

演じたイタリーやシシリーなどの植民地からはBC 3世紀に於て1人の優勝者しか記録されていない。記録されている唯一の奉納物は恐らくオリンピアと自分の都市の伝統的な関係を復活させようとしたヒエロII世を誉えたシラクサ人のものである。<sup>(13)</sup>しかし、遠方からの選手が欠けたわけではない。マケドニア、エジプト、小アジアからやって来ている。王や王子自身は滅多に競技に参加していない。ペルガモンのアタロスI世の父アタロス<sup>(13)</sup>はオリンピアの戦車競走に優勝し、プトレミー・フィラデルホスはデルフイの戦車競走に、彼の妾であったベリスチッケはオリンピアの戦車競走に夫々優勝しているが、競技に出場して真剣に試合しようとは考えていなかったようである。

完全な記録となって現存している唯一の種目は競走であるが、これを全プログラムを代表するものと考えても差しつかえないだろう。BC 324年からBC 268年の間の競走にフィリッピとアムピボリスの他に4人のマケドニア人が優勝し、それ以後は姿を見せていない。一方、その間に小アジアやアイルランド地方から選手が絶えず増加して流れ込み、新しい都市は古い都市と張り合っている。BC 3世紀初頭にはアレクサンドリアのトロアスとセレウケイアの名がリストに記録されていると同時に、カリヤ<sup>(14)</sup>やリディアの人間の名も記されている。

試合に於ける注目すべき変化は全マケドニア世界に大変革をもたらした不可避免な政治変化の結果である。オリンピア競技の興味と重要性は独立的な都市国家の組織を結合させ、競技者は個人としてだけでなく、それぞれ都市国家の代表者として技を争ったことである。西方に於けるローマとカルタゴの台頭はイタリーやシシリーの都市国家にとって、ちょうどマケドニアがギリシアの都市国家にとって命取りとなったように死活を決するに至った。その地方に於てはエリス地区のアイトリア人とアカイア人のように同盟が結ばれた。東方に於ける都市国家のみが自律性の装いを保持し続けていた。都市国家の組織はアレクサンダーの征服が東方に拡大されたヘレニズムの一部であったが、沿岸地方の古いギリシア都市はその独立を回復し、新しいギリシア都市が至る所に湧き起った。実際にその独立は単に幻影的なものであったが、それらの都市は表面上自律性の外形の多くを一心に固守した。その中でも祭典競技が重要な位置を占めていたから、如何なる都市でも運動場 Gymnasion に競技場 Stadion を持ち、祭典競技を行っている。競技的な関心はあらゆる所で衰頹する傾向にあったけれど、東方の新しい生命が集まり、良き時代の都市国家の例に順じて、各都市はオリンピアで技を争うために代表者を送った。

(13) Pausanias VI.12.2, 15.6      (14) Pausanias V.8.11

エリスと東方の間には密接な交流がなされていたが、オリンピアや他の所で優勝したレスラー・テネドスのデモクラテスを誉えた布告に興味ある説明が与えられている。<sup>(15)</sup>デモクラテスと彼の父はエリスに居住してその市民権を受け、母国に戻って彼の父はテアロコスの任務につき、テネドス島を訪れたエリスのテオロイを壘に歓待したため、彼はデオニシア祭の供儀をあづかる代理人に任ぜられるという名誉を得ている。

ギリシア世界の対抗意識とオリンピアの関係について競技者像以外の国王や政治家などの像から若干の指摘資料を集めることができる。エリスのリデウスはアンチゴノスとセレコスの像を奉納し、イアミダイ家の予言者テラシボロスはフィルポスの像を奉納している。<sup>(16)</sup>また予言者自身は足下に供儀に使われる犬と肩にマダラトカゲを表象した像によって誉えられている。<sup>(17)</sup>競技者像の場合のように個々のエリス人の像の数は注目される。彼らはアイトリア人、ケパレニア人、ペレニア人、プリヒデア人などの種々の像を奉納してこの時に於けるエリスの繁栄と重要性を表徴している。

後継国家の国王の中でプトレマイオス・ソオターだけしかオリンピアには記念建造物を残していない。パウサニアスは彼によって立てられた像を見たというし、また彼を表わした群像も見ている。<sup>(18)</sup>エジプト王ではなしにマケドニア人の様相をしていることに注目される。他の後継国家の国王は祭礼の暇を作るには余りにも争いで忙し過ぎたにちがいない。オリンピアは彼ら自からの奉納物はないけれど、遊撃兵によって2, 3の像が立てられている。チデウスによって奉納されたモノフサルモスとセレウコスの像については前にも少々触れたが、これらの王が戦ったBC 316年以前に立てられたものであろう。モノフサルモスと彼の息子デメトリオス・ポリオルケテスの像はビザンチン人によって立てられた。<sup>(19)</sup>これらの像の碑文とビザンチンの布告が実際に発見されている。ビザンチンはデメトリオスの凱旋を祝すために使節を向けているので、その布告はBC 306年サラミスでプトレマイオスを打ち負した時に結びつく可能性がある。ビザンチンはトラシア人に援助を要請しているので、デメトリオスに感謝する理由があったにちがいない。恐らく彼らはエジプト権力の生長を恐れたのであろう。

デメトリオス・ポリオルケテスの他の記念建造物は個人的にオリンピアと接してエリス人によって作られたと思われる。<sup>(20)</sup>デメトリオスがコリンス同盟を復活させ、フィリップやアレクサンダーのようにヘラス軍の指揮官に任命されたBC 302年頃に立て

(15) Olympia V.39 デオクラテスはオリンピアに像を建てられた。(Pausanias V.17.1)

(16) Pausanias VI.16.2, 14.9 (17) Pausanias VI.2.4

(18) Pausanias VI.3.1, 15.9 (19) Pausanias VI.15.7 (20) Pausanias VI.16.3

られたものであろう。デメトリオスはフィリップが同じ立場でフィリッペイオンを建造したように彼自身この記念建造物を奉納したかどうかは分らないが、アテネでデメトリオスは熱狂的な歓迎を受け、またギリシア人の間で非常な人気を持っていたことを思い起すと、エリス人自身の中の援後者か、あるいはお世辞家の贈物ではないかと思われる。

一世紀半にわたる混乱の後、マケドニア王国はアンチゴノス・ゴナトスの下に再び勢力を伸ばし始めた。哲学者であった王はオリンピアよりアテネに引きつけられた。フィリップのように名声を高める野心は持っていなかったし、世界帝国の首都をオリンピアの置いたアレクサンダのような目的は持たなかった。アンチゴノス・ゴナトスの勢力範囲からオリンピアとエリスははずされたが、敵の陰謀によってオリンピアを干渉せざるを得なかったようである。

アンチゴノスは各都市に僭主を置くか、あるいは支持するかによって自己勢力を拡大したが、アンチゴノスが「ヘラスの自由を回復させるために」ペロポネソスに上陸したとき、エリスはエフィルロスを押した。そのためアンチゴノスはフィルロスを打ち倒してそこに僭主アリストチモスを置いたが、この僭主の越権は住民を怒らせ、ついに暗殺された。しばらくの間、このようにしてマケドニアとオリンピアの関係は全くとだえてしまった。反マケドニア的なエリスの民主党はこの時からオリンピアの権利を取り戻した。実際にエリスはアイトリア、フィルロス、スパルタ、エジプトなどのアンチゴノスの敵国と絶えず同盟を結んでいる。そのためオリンピアにはアンチゴノスの奉納物は何一つとないばかりか、アンチゴノスを誉えた像もない。それに反して、マケドニアの敵国のためには神域の中に席が設けてある。事実、マケドニアはヘラス自由の破壊者と見做されていた。このはびこった感情はパイオニアのドロピオンを誉えた碑文に表わされている。<sup>(21)</sup> ガリア人の侵入の後、パイオニアはマケドニアから独立を取り戻し、ドロピオンの下に同盟を確立した。ドロピオンの故国の人達は「王国の建設者」としてドロピオンの像をオリンピアに奉納して勝ち得た自由を記念している。

アイトリアはその初期からエリスと密接な関係を持って来たので、エリスがアイトリア同盟を支持することは当然のことであった。彼らはBC 191年にアカイア同盟を結んで、ローマに対抗するまで忠実にアイトリア同盟を支持している。アイトリア条約はオリンピアで公表され、アイトリアがBC 275年にアカルナニアと条約を締結した時も、その写しはオリンピアの神域に置かれた。<sup>(22)</sup> BC 211年に再びアイトリアがローマと条約を結んだ時、エリス人は同じ誓いを立て、その条約はローマとオリンピア

②1 Olympia V.303 ②2 Tarn 「Antigonos Gonatas」 P.210

に保管された<sup>(23)</sup>。パウサニアスはアイトリア人を誉えた像をいくつか伝えているし、またエリス人の像がアイトリア人によって奉納されていることも知られている。<sup>(24)</sup>

マケドニアの敵国の中で最も恐れられたのはエジプトのラジダイであった。エジプトは公戦よりむしろ平和的な洞察と陰謀によって動いていたから、非常にマケドニアは恐れていたようである。彼らは「ギリシア文化の象徴」「ヘラス自由権の保持国」としての姿勢を取り、フィリップやアレクサンダーの政策に歩調を合せて汎ギリシア的な神聖を支持し、その手段によって同情を買おうとしていた。そのためにオリンピアに多くの記念建造物を奉納することはそれに対する献身的な行為の証拠物となった。プトレマイオス・ソオターについてはすでに述べたが、彼の後継者フィラデルホスは何年かの間ギリシアに干渉していない。しかし、BC 274に彼は自分の妹アルシノエと結婚し、それでこの野心的な妹は間もなく活発な政策を取った。<sup>(25)</sup>この頃からオリンピアでのマケドニア人の一連の優勝は終りをとげ、アレクサンドリアの優勝者が現われている。BC 264年フィラデルホスの妻ベリスチックはオリンピアの4才馬戦車競走に優勝している。<sup>(26)</sup>アルシノエの死んだBC 275年前後にサモスの子ナウラルキ・カリクラテスによってフィラデルホスとアルシノエの立派な記念建造物が奉納されている。<sup>(27)</sup>王と王女の像は反響廊のすぐ前の石台に建られた10m程の2本の柱の上に置かれた。フィラデルホスの他の像はマケドニアの遊撃兵アリストラスによって奉納されている。<sup>(28)</sup>プトレマイオスの反マケドニア政策をエリスが支持していることはこの時代の像から証明することができる。フィラデルホスは「アレウスと全ギリシアの善意のために」と碑文に走り書きしてあるようにクレモニデア戦争でアンチゴノスとの戦いに破れて没したスパルタのアレウスを誉えた像を立て、クレモニデスの兄、アテネのグラウコンは同じ戦争での別な英雄であったが、ヨウデルケデスからそれにふさわしい名誉を受けている。<sup>(29)</sup>この戦争の後で兄弟ともにエジプトに亡命しているが、ヨウエルゲテスはセラシアの戦いの後でクレモニデスを誉えた像を立てている。<sup>(30)</sup>

クルチウスは運動場 Gymnasion と装飾柱廊 Stoa. Poikile の再建をフィラデルホスに帰しているが、装飾柱廊 Stoa. Poikile は恐らくフィリップイオンと同時代のものであろう。運動場 Gymnasion と体育場 Paleastra の南の柱廊はすべて BC 3 世紀に建られたものであるが、特別、寄贈と結びつく証拠がない。恐らくエリスはこの

<sup>(23)</sup> リヴィウス「ローマ史」26巻25    <sup>(24)</sup> Olympia V. 2. 95

<sup>(25)</sup> Tarn 「Antigonos Gonatas」 P. 261

<sup>(26)</sup> メゾ「古代オリンピック競技の歴史」P. 77    <sup>(27)</sup> Olympia V. 306~307

<sup>(28)</sup> Pausanias VI. 17. 3

<sup>(29)</sup> Pausanias VI. 15. 9 「グラウコンはオリンピアの戦車競技に優勝している」

<sup>(30)</sup> Olympia V. 206

時代に外部から援助を受けずにすまず程十分に富を持っていたといわれるから、独自で建造したものであると考えられる。

マケドニアに対抗するペロポネソスの主な防御国は常にスパルタであったが、1世紀半の間スパルタは良き伝統を持った王の下に望みない勝負に戦いを続け、絶えずエリスからの援助を計算に入れていた。エリスはBC 331年のアンチパトロスとの戦いにスパルタを援助しているし、スパルタはアレウスによって復活されたペロポネソス同盟の成員国の一つで、クレモニデア戦争に参戦している。そのためスパルタ王の像がいくつかオリンピアに立てられている。スパルタはBC 338年アルキドモスⅢ世の死後、オリンピアに像を奉納しているし、またエリス人はアレウスのために像を立てている。スパルタは英雄クレオメネスの下にかつての覇権を回復するかに思えたが、スパルタの愛国的な政策はアカイア同盟とアラトスの嫉妬によって妨げられた。アラトスはマケドニアのアンチゴノス・ドソンの援助を求めたので、ドソンはペロポネソスを干渉する機会を得て、BC 222年セラジアでクレオメネスを決定的に打ち倒した。クレオメネスはエジプトに逃れ、ペロポネソスはマケドニア支配に変わった。

デメトリオス・ポリオルケテスがオリンピアに記念建造物を造ってから80年後、アンチゴノスは同形のものであるが、さらに心打つような記念建造物をたててセラジアの勝利を祝った。デメトリオスを王とするエリスのグループに対して、ドソンは自から王となるヘラスのグループを置き、汎ギリシア主義の神聖なる領土のヘラス指導者としてマケドニアの権利を主張した。実際、この賢い支配者の下にヘラスの統合が再現されるかに見えたが、不幸にもドソンはその後間もなく没してしまった。彼の後見となったフィリップⅤ世が政権を握り、非常に色々な才幹を持った支配者になったが、アカイア同盟の権力の生長と共にアイトリアの妬をかい、ギリシアを民族的な戦争に陥入れた。アカイアは常にフィリップⅤ世を支持したが、エリス、スパルタ、メッサニアはアイトリア側に味方した。BC 218年フィリップⅤ世はエリスに出征し、その途中オリンピアを訪れて軍を休ませてゼウスに供儀を捧げ、トリフィリアを征服し、西エリスに侵入してアイトリア同盟からエリスを脱退させようと説き伏せたが失敗した。<sup>(31)</sup>

フィリップⅤ世の野心と陰謀はその場面をローマに持ちこんだ。すでにローマとアイトリアがBC 211年に条約を結んだことは述べたが、それに伴いローマ軍はギリシアに進駐して来た。アイトリアとエリスは協同してキレネにローマ軍を上陸させた。BC 208年、ルキウス・マンリウスはハンニバルによってシシリーやタレンチネを追わ

(31) Polybios IV.73, 84, X.41

## 古代オリンピック競技の歴史

れた親ローマ派の亡命者達を故国に復帰させるため、オリンピック競技の使節を兼ねて元老院から特派された。<sup>(32)</sup>しかし、交友国ギリシアに有効な援助を与えるには余りにもハンニバルとの戦争で多忙をきわめていた。BC 206年にアトトリアはフィリップV世と条約を結び、翌年ローマもまた平和締結したが、長く続いていない。BC 199年ローマは強制的な干渉に乗り出し、チチュス・クインクチウス・フラミニウスがギリシアに派遣され、最終的にキノスケファライでフィリップの軍を打ち破った。翌年、ギリシアの運命を知るために期待と希望を持った群衆はイスミアの競技会に集まり、フラミニウスはその場でギリシアの自由を宣言し、賢く自由を用いるように勧告しギリシアを去った。しかし、ギリシア人にはもはや自由を操作する力はなく、多くの都市国家は政治的な内訌と階級制度の憎悪が猛威をふるい、居住民は不満を抱き、無政府状態と混乱が低迷した。BC 194年、アイトリアはミリシア王国のアンチオコスⅢ世をギリシアに招き、アカイア同盟に対抗するための援助を要請した。この野心的な王はオリンピックのゼウス神殿に「アッシリアの機で織られ、フェニキアの緋で染められた羊毛の華麗な緞帳」を奉納し、<sup>(33)</sup>1000名の兵士を急送派遣した。そのためアカイア同盟はローマに訴えた。ローマは出征軍を派遣し、アンチオコスを簡単に打ち破ったので、エリスはメッサニアと同盟を結ばねばならなくなった。BC 183年、アカイア同盟の主軸となったメッサニアのフィロポイメンは同盟に反感を抱き、結果として起った戦争に捕虜となり、その後メッサニア人の手によって殺害され、同盟の指導権はメッサニアを打ち負したポリビオスの父リコルタスの手に落ちた。ポリビオスと彼の父リコルタスはローマの至上権を知りつくしていたので独立を保持していくにはギリシア人に無用の抵抗をいましめなければならないと考え、ローマをギリシアの間の幹旋に尽力した指導者であったが、その後、カリクラテスに同盟の指導権が渡されている。

第3次マケドニア戦争が勃発したとき、アカイア同盟は心ゆくまで吟味した結果ローマと運命を共にすることに決め、BC 169年にアカイアの使節がテッサリーの執政官マルキウス・フィリップスに援助を申し出るために派遣されたが、彼はこれを拒絶している。<sup>(34)</sup>しかしながら、アカイア人はオリンピックは彼の榮譽をたたえた乗馬像を立て、それはローマ役人の像の最初のものとなった。

ポリビオスの友人で彼の後継者であったアエミリウス・パウルスはギリシアに同情的で広い視野をもった人物であったが、そうした名譽は払われなかった。BC 168年

<sup>(32)</sup> リヴィウス「ローマ史」28巻73,35

<sup>(33)</sup> Pausanias V.12.4 村川堅太郎「オリンピック」P.195 <sup>(34)</sup> Polybios 23.13



彼はピドナの戦でマケドニアのペルセウスを撃破した後、オリンピアを訪れ、「あたかも自分の神の面前であるかのようにゼウス像をみつめて」深く感動し、ローマ市のカピトル丘のジュピターに行くような大供儀を命じた。<sup>(35)</sup>オリンピアのゼウスに表されたこの敬意はローマに於けるヘレニズムの生長による影響の典型で、オリンピアが帝国支配の下に重要な役割を受持つ前兆であった。

ピドナの戦の後、ローマはギリシア併合をためらったポリビオスを含む1000人の政治反対者をカリクラテスの忠告に従って追放したが、政治的にも社会的にも経済的にも領土は荒廃した状態であったため、問題は増々悪化していった。BC 151年に行われた追放者の返還はただ混乱を招くだけであった。BC 149年、アカイア同盟とスパルタはローマを無視して戦争状態になった。この戦争はムンミウムのコリント攻略に終り、同盟は解散され、若干の地方自治的な独立は依然として認められたけれど、マケドニアのローマ支配者の属州となった。ムンミウスがコリント攻略したとき、配下の兵士が相当の暴虐を働いたので、ローマ人の粗野を代表する人物であるかにいわれるが、ポリビオスの記事から推定しても、他の点では自制と清廉をもって行動している。彼はイスマスを神聖な場所に再興し、オリンピアとデルフィの神殿を富ませ、アカイアの戦利品から21の金の盾をオリンピアに奉納してゼウス神殿の欄間を飾ると同時に、ゼウス像と彼の乗馬像2体を立てた。<sup>(36)</sup>一方、エリスはその返礼として彼を誉えた第3の像を奉納し、アウグススの時代には一層入念な記念物がムンミウスに寄贈されている。これらの記念物はムンミウスの人気とエリス人の感謝を立証するものであるが、実際、ギリシアは無政府状態を恐れてローマ支配の下に平和と秩序の前途を歓迎したのである。<sup>(37)</sup>

## (3)

さて、競技の歴史に戻そう。この時代に於ける競技の壮厳さは廃れてしまったばかりでなく、一般人も競技に魅せられなくなっていた。競技者の数も少なくなり、以前には選手権保持者をだした都市からの参加はもはやなくなってしまった。むしろ、ギリシア西部やはるか東方の体育場 *Gymnasia* のエフボイ訓練の中に競技の重要性と新しい祭典の生長による競技愛好の感情が新しく芽ばえて来た。BC 4世紀のオリンピア競技に代る他の興味・関心で注目すべき傾向は観戦的なものではなくなったことと、文学、科学、芸術、商業はアレクサンドリアや東方の都市を永久的な本拠地、保護地として繁栄したため、オリンピアの集会はしばらくの間公告の手段や東西の会合地

③⑤ リヴィウス「ローマ史」35巻28

③⑥ Polybios 31.17

③⑦ Pausanias V .10.5 .24.4

としての価値を失ったことである。

競技的な成功にまつわる特権はアレクサンダーによりオリンピックの優勝者デオニソドラスの扱い方に示されているし、またポリビオスの書物の中に多くの証拠記事を見ることができる。<sup>(38)</sup>特にポリビオスはそのような者に与えられた因果関係とその時代の実際的な所感をみごと看破している。彼がプトレミⅣ世の軍隊編成に協力したポリクラテスについて語るとき、ポリクラテスの持つ富と生れから生じる利益に「競技者として父ムナジアデスが勝ち得た名声」が加えられ、あるいは走者アカチデスの兄としてポエオタルキ・ピセアスを述べるとき、それはあたかも近代歴史家が有名な貴族の息子として傑出した兵士や政治家を記述しているようである。

立派な地位の人間がプロ競技者の数に比較すると少なかったけれど、公的な競技会に出場して技を争った。例えば5種競技者として名高いテネドスのデモクラテス、シキオンのアラトス、メッサニアのゴルゴスがあげられる。特にゴルゴスについてポリビオスの語るところによれば、彼は競技をやめて政治に専心し自国に奉仕するようになったとき、競技者を性格づける実利主義によって常に問題を処理したので、論議に於ても同じような名声を得たといわれる。この時代の競技者は性質に於て獣化する効能を持った厳格な専門的トレーニングをやる必要があった。BC3世紀にこの専門化がプロ競技者として姿を現わしている。コスのフィリノスはオリンピックで5回の優勝と汎ギリシアの祭典競技で19回の優勝を勝ち取り、ローデスのレオニダスは4回にわたるオリンピアードに12の優勝を記録している。過度に発達した腹はファルネセのヘラクレスに表わされているように「賞金目当て」の職業選手の著しい特徴であった。その当時のレスリングとパンクラチオンに優勝した人達には「ヘラクレスの後継者」というタイトルが与えられ、さらに著名な競技者はパラドクソス Paradoxos(記録破り)と命名された。またBC2世紀の碑文にはペリオデネイクス Periodonikes(万能選手)<sup>(40)</sup>というタイトルがギリシアの4大祭典の優勝者に用いられた。またプトレマイオスⅣ世は技にたけたアリストニコスをかかえてテーベのクレイトマコスとボクシングの選手権を争うためにオリンピックに送っているから、しばしば職業選手は金を出費してくれる裕福なパトロンを持っていたようである。プロフェッショナリズムの影響にもかかわらず、競技が著しい頹廃から免れたということはよくオリンピックの権威者達によっていわれているが、事実、そうした墮落の例はBC332年に5種競技の相手を買収して罰せられたアテネのカリポスの記録しかない。<sup>(42)</sup>実際にこの時アテネ人は

③ Polybios 37.7, 5.64 ③ Polybios 7.10, Pausanias Ⅷ.14.11

④ Olympia Ⅴ.186 ④ Polybios 27.9 ④ Pausanias

エリス人に罪を免じてもらうために雄弁家ヒペレイデスを送り、結果的にはデルフィの神託によって払わされたが、この罰金から6個のゼウス像が立てられた。

プログラムには4才馬の2頭立戦車競走が第129回オリンピックに、8年遅れて4才馬の競馬競走、第141回オリンピックに少年向きパンクラチオンが加えられた。少年向きのパンクラチオンは少年のために置かれた競技ではなく、ローマ人による影響の芽生えを印す人気取りの獣的な催し物の愛好を説明している。

宗教的にオリンピアの保守主義はBC4世紀に注目される刷新的な傾向に勝ち誇ったように思われるが、ヘレニズム時代の主な現象の一つは生きている人間の神格化である。フィリップとアレクサンダーは終生神の名誉を受けている。アレクサンダーの死後、その習慣は急速に広まり、神殿、祭壇、競技などが奉納され、祭典競技はマケドニア、アジア、エジプトの王などを誉えて開催された。<sup>(43)</sup> アンチゴノス、リシモコス、プトレマイオス・ソオター、デメトリオスなどは終生神として崇拝されている。デロスでフィラデルホスはオリンピアと肩を並べるソオターの祭典を創設し、そこでは如何なる者も神の名誉を受け、ゼウスと平等な権利を持つことができたと記録に書かれている。もしこの時代の懷疑主義と不思議な宗教の中にゼウスの信仰がギリシア世界で実際支持されなかったら、この宗教の威厳はアエミリウス・パウルスのようなローマ人には気に入られなかっただろう。

文章をローマ時代に移す前にここで考えなければならない問題がある。それはオリンピアの競技がヘレニズムの世界に如何なる影響を及ぼしたかである。

初期の植民地時代のオリンピアは地中海世界に散在するギリシア都市国家を実際に結合させる絆であり、彼らはその中に異国人とギリシア人を区別する宗教的・政治的・社会的理想に具現化された自国の典型的な文化を見出した。BC5世紀に於ける異民族に対してのギリシア主義の凱旋はオリンピアとその祭礼に十分に表現され、そこは他の如何なる場所よりも優れた汎ギリシア主義の公認聖所であった。ペロポネソス戦争に於ても、またその後にも、オリンピアはギリシア世界の平和と統合に役立った。オリンピアは汎ギリシア主義の真の中心としてアレクサンダーに気に入られたが、BC3世紀に於て、ヘレニズムが世界を征服したとき、汎ギリシア主義は滅亡し、東方のヘレネ王国にはヘレネ人と異国人の差別は存在なくなり、オリンピアは変化した。競技的な伝統の栄光は生きつづけていたが、競技を除くと他のものは余りない。対抗王国の王達は「ヘラスの覇者」「ヘラス自由の回復者」と宣言したが、彼らの戦争の中にはヘレニズムの入る余地がなかった。彼らはヘレニズムや他の理想の

(43) Tarn 「Antigonos Gonatas」 P.79,128,135

ために戦うのではなく、自己拡大のために戦ったのであって、彼らの宜した自由は表面上のものにすぎず、そのために都市国家の自律性は永久に消去った。エリスは時代の陰謀の巻き添えされただけでなく、オリンピアを表象する理想は生命のないものになった。ヘレニズム時代は強烈な活動の時代であったが、宗教、政治、芸術、科学に於ては理想の時代ではなく、経験の時代であった。しかし、オリンピアは経験ではなく、過去の理想に支えられていた。それ故、壮大な建物が神域に豊富になり、一年中、供儀が古代の儀式に従って維持され、社会的な競技会としての祭礼は絶えず民衆を引き出したけれど、ギリシア生活と思想に与えた影響は感じとることができない。

### Ⅲ

#### (1)

ギリシア独立の喪失に続く世紀はオリンピア歴史の失意時代である。都市国家の独立はオリンピアに絶体必要なものであったが、その喪失は競技会に於ける競争と興味の衰頹、建造物の断絶、資金の欠乏を生みだし、豪華な祭礼と供儀を維持するにはそれ相応にできなくなった。その衰頹は特別な理由というよりむしろ共和制支配によるギリシアの一般的な状況によるものである。既してローマ人は特別な思慮を持ってエリスを取り扱ったようであるが、これはエリス人がポリビオスの賢い助言に耳を傾け分別のある政策を取ったこと、オリンピアがその征服者に心からの尊敬を鼓舞したことによるものである。

オリンピアの神聖を踏った唯一のローマ人はスラであった。小アジアのミトラダテスⅥ世との戦争に軍資金が欠乏してオリンピアのゼウス神殿を含むギリシアの主な聖所を荒し、テーベの征服地を割当てて神に償うつもりであったらしいが、返済して<sup>(1)</sup>ない。さらに事態が悪化している。B C80年の戦争の結幕に彼は少年種目の競走だけを残し、第175回大会をローマに移す計画を立てて実行し、戦勝祝賀に華をそえた。スラはギリシア最大の祭典をローマに永久的に移す考えであったらしいが、この計画は次回のオリンピアードの始まる前に彼が死んだので、彼と共に没した。

ローマとオリンピアの関係はこの時代に奉納されたローマ役人の像によって示されている。ムンミウスの像については既に論じたが、その後にメテルス・マケドニウスの像がマケドニアのダモンによって奉納されている。<sup>(2)</sup>これらの像の多くは都市国家一特にエリスの奉納物である。ローマ最高僧団の一人であったムキウス・スカエボラの像はB C98年頃に大司祭を務めたアジア大管区の住民によって納められた。<sup>(3)</sup>一方・ア

(1) プルターク英雄伝「スラ」 (2) Olympia V.325 (3) Olympia V.327

カイア同盟はBC9カ年頃にカイアの前財務官であつたアンカリウスに同様な名誉を授けている。<sup>(4)</sup> またエリス人が奉納した像の中でマリウスを誉えたものがあるが、<sup>(5)</sup> ギリシア人に対して自分の無知を誇り、ギリシアに全然関係のなかった彼に何故エリス人がそうした名誉を授けねばならなかったのか分らない。恐らくお世辞的な心づけであつたと思われる。非常に断片的な碑文から推定すると、リキニウスによって立てられたジュリアス・シーザーの像らしいものがある。<sup>(6)</sup> エリス人は中央ギリシアの総督としてシーザーに奉仕し、パルザルス戦争後、その地方に配下部隊を残し去つたフス・カレヌスを「救い主」「恩人」として誉えた像を奉納している。<sup>(7)</sup> これらローマ役人の像には特別な名誉があてがわれ、これらの像はレオニダイオンとボウテウレリオンの間の道路の南側ぞいに置かれた。

しかし、ローマの親交はギリシア独立の喪失を補うことができなかった。その結果、競技の衰頹がはっきりと現われて来た。幸にもスラ暴挙後のBC72年のオリンピックの記録は完全な形で現存している。短距離競走、往復競走、武装競走はエリス人のヘカトルノスによって優勝され、長距離競走はローマのガイオス・ロマイオスがローマ人として初めての優勝者になった。その地にシキオン・コス・アドラミチオンの都市がそれぞれ優勝者をだし、レスリングでは「投げられない」というタイトルで誉えられたアレクサンドリアのイソドロスが優勝した。6種目の馬術競技は全部エリスに優勝が渡つた。少年種目の中で2種目はエリス人が優勝し、キパリセイアとアジアの住民によって1種目ずつ優勝されている。この時代を全体的に見ると、競馬と戦車競走はエリス貴族の独占物で、少年種目は地方の競技者によってしめられ、その他の種目は特にアレクサンドリアなどの東方出身の職業選手が優勝している。その中で、<sup>(8)</sup> いわゆる「ヘラクレスの後継者」と呼ばれる選手が3人でている。

ちょうどBC4世紀の始めの危機の後でのようにスラがオリンピックを擄回した後、不正行為が再び現われている。BC68年にローデスのフィロストラロスは買収して罪せられ、この罰金でザネス像が立てられた。さらに競技の衰えたことはこの時代に立てられた数少ない競技者像からも分る。またオリンピックで出土されたこの時代の碑文の中で3個だけしか競技の優勝を記録していない。<sup>(9)</sup> 1個はエリスのボクシングの優勝者のもので、他の2個はアンチオキア人のものである。他方、馬術競技の優勝者を誉えた碑文の数が増えているが、これは例外なく、エリス人のもので、馬の養育と馬術を結びつけたことを表わしている。

(4) Olympia V.328 (5) Olympia V.1326 (6) Olympia V.365  
(7) Olympia V.330 (8) Pausanias V.21.10 (9) Olympia V.211~213

さらに私的な名誉像の碑文が多く見られるが、これらの中でごく少数は同朋市民や恩人を誉えたアカイア同盟などの都市国家の奉納物である。それらの一つにネメア出身のデオニシアの芸術家によってメッサニア人を誉えた像が立てられている。しかしながら、名誉像の多くはエリス人を誉えたものであり、エリスの権威者またはその関係者によって立てられた。

エリス人は互に近親結婚をし、養育した馬を売り、オリンピアやネメア、デルフィで馬の競技に出場する以外にめったに農事に関係せず、オリンピアとエリスの役事について互に名誉像を立てたりして世代から世代へと世襲財産で生活していた。例えばモロゾス家を例にとると、アテネのアレオパゴスがモロゾスの息子サミポスに像を立てたBC4世紀から、エリス市とオリンピアの評議会がデメテル・カミネの古代祭儀の司祭であったマルクス・アウレリウス・サミポスの娘アムトニア・バエビアに像を立てたA.D.2世紀まで、アカイアはモロゾス家のために像を寄贈している。<sup>(11)</sup>モロゾスという名は馬養育人の家系で北方から来たことを示し、実際にオキュロスの後継であるといわれる。A.D.1世紀にサミポスはテオコロス（祭儀官）として奉務している。

さらに興味深いのはフィリストス家とテオドト家の記録である。<sup>(12)</sup>7体の像の中で3体は女性で、3世代を表わし、彼らの多くは競馬や戦車競走に優勝し、像の若干はエリス市またはオリンピアの評議会によって誉えられたものである。BC36年以前の像でしばしば妻が夫の像を奉納してたてたものがある。また父と子で互に像を作り合ったものもある。テオコロスであったメネデモスがオリンピアの戦車競走に優勝した自分の息子を誉え、息子のスポンドホロスはネメアのチオ馬の戦車競走に優勝し父を誉えて像を立てている。

この時代の碑文は共和制支配下のエリス旧貴族の絶え間ない活動を意味すると同時に、オリンピアの祭礼が地方的なものになったことを示している。これと同じ特徴が別な碑文にも現われている。ギリシアの独立時代に於て都市国家はお互の条約書をオリンピアで発行するのが習しであったが、ギリシア政治の衰亡の中に重要視された都市国家間の国境線設定の記録が条約の代りに時代から時代へと残された。これらの碑文の中で最も興味深いものはスパルタとメッサニア間の国境線論争である。<sup>(13)</sup>その論争は2世紀以上も続き、最終的にチベリウスの時代まで決定を見ず、ミレシアが仲裁に入ってメッサニアの利益になるように裁可されたが、この裁定を公にするためにオリ

(10) Olympia V.191~218

(11) Olympia V.396~423

(12) Olympia V.198~204

(13) Olympia V.52

ンピアに碑文を刻んでいる。その碑文はそれを権威づけるエリスの布告、仲裁の公文書とその写しの3部からなり、神域の中でメッサニア人が最も光栄とした記念物ニケの像の台座に置かれた。他の同じような碑文にはスパルタとメガロポリスの論争に関係した<sup>(14)</sup>ものがある。

祭礼の規模が縮小した結果、エリスの権威者達は祭礼を維持するために自己資金を出費せざるを得ず、さらに都市国家間の争いによる一般的な困窮によってオリンピアは退歩せざるを得なかった。一時的に戦車競走が中継されたのはその結果の一つである。ヨセピュスの語るところによると、ヘロドの時代に於て祭礼は基金不足に苦しみ、ヘロドはその壮厳さを維持させる助成金を手配したといわれる。さらにBC40年頃、震災にみまわれ、ゼウス神殿とその他の建築物に大きな損傷を受け、修理に多額の資金が必要となった。

## (2)

かくして、シーザーの出現と共にオリンピアは2世紀を頂点とし、3世紀中期のゴート族の侵入まで継続した長期の繁栄に入る。それはBC36年からA. D. 265年までの役人の記録と一致している。この時代以後は実際に碑文もなければ、優勝者の名前さえ見あたらない。この生き返った繁栄はシーザーによって始められ、アウグススとその後継者によって行われた領土組織の影響である。アレクサンダーの遺産を吸収するにはギリシア人に部分的なローマ市民権を持たせ、お互の都市が独立し、しかもローマに統轄されるという自律性を与え、またローマの神々と同一視されて来たオリンピアのゼウス崇拝などのようなギリシア宗教を維持することによってヘレニズムを助長し、ギリシア人の忠誠を確保しなければならないことをローマ人は理解していた。その結果、ギリシアとローマは完全に融合した。

ローマはギリシアを復起させるのに相当苦しんだが、この政策はギリシア母国よりはるか東方に於て成功を収めた。シーザーはローマ植民地としてコリントの再興に乗出してギリシアの商業的な繁栄を復活させようとし、アウグススはパトライとニコポリスに同様な植民地を建設したが、コリントとパトライは急速に物質的な繁栄を再び取り戻したけれど、ギリシア的な都市というよりローマ世界の民族的な都市であり、その繁栄は都市に人口の集中化を招き、逆に住民の貧困を悪化させただけであった。実際にヘレニズムの中心地はオリンピアの記録がこれを立証しているように小アジア、シリア、エジプトのギリシア的な都市であった。帝国時代に於てはギリシア母国出身の競技者は実際に姿を見せなくなり、海外の職業選手によって独占された。こ

(14) Olympia V. 47.48

うした状況の下にオリンピックの祭典競技がローマ人にとって重要になったことは明らかである。オリンピック競技がギリシア植民地時代に東西の植民地を結ぶのに役立ったようにローマと東方のギリシア的な都市を結束させたものはオリンピックの祭典競技であった。

オリンピックの復活は大部分アウグススのような初期の皇帝達の個人的な関心によるものである。ギリシアとイタリアの宗教的な聖所の復活はアウグススの政策の本質的部分であったが、これとは別に彼はローマ人としては全く異常なほど心から競技を愛好したと思われる。彼は競技場の技術的なボクシングをただらと見るより活気のある路上試合を好んだようだけれど、特にボクシングなどの競技を観戦することを好んだ。<sup>(15)</sup> また競技者に特権と報酬を増すことによって職業競技者を鼓舞し、ギリシアの古代祭典競技の重要性を復起させただけでなく、ギリシアやイタリアに同じような祭典競技を創設した。<sup>(16)</sup> ニコポリスにはアクチオンの凱旋を記念して多彩な5年目ごとの競技を設けて、優勝者に賞品として冠を授け、アクチオニカイというタイトルを与え、オリンピアードの年号に代る意図を持ったアクチアードという新しい体系の年号を持って呼んだ。A・D・2年には「Italica Romaia Sebasta Isolympia」という大言壮語の表題をもった5年祭を新しく建設した都市アウグスタリアに再組織し、<sup>(17)</sup> 新紀元号はイタチードによって日付けられ始めた。競技と馬術の規則はオリンピック競技のものをモデルにしていることがオリンピックから発見された碑文から知ることができる。一方、音楽的な競演はピチアとメネア祭の筋に順じている。オリンピックやその他のギリシア的な競技の名に関係した古代の祭典を正確に模倣しているのは帝政時代に設けられた数多くの祭典競技の特徴であり、アウグススはこの先駆者である。

オリンピックに対するアウグススの関心は、BC40年頃のゼウス神殿の修理をしたアグリッパと結びつくなら、元首政治を取る以前にさかのぼるといえるが、アカイア同盟がオリンピックにアウグススの像を奉納したBC27年以前であることには間違えあるまい。<sup>(18)</sup> 帝政時代の文献や碑文に記されている古代儀式や困襲を綿密に調べると、疑いもなくアウグススのイニシアチブによるところが多い。<sup>(18)</sup> 前世紀の混乱時代に無視されていた多くのものがアウグススの時代に復活されている。アフリカヌスによると、戦車競走はしばらくの間中継されていたといわれるが、皇帝家のために復活された。この時代の碑文はやがて皇帝になったチベリウスがBC20年からBC4年

(14) Suetonius 「Octanias」 45 (15) Gardiner 「Athletics of the Ancient worlp」 P.45

(16) オリンピアのような競技とピチアのような音楽的競演の二部からなり、賞品として花輪が与えられた。 (17) Olympia V.367 (18) Olympia V.530



の間の戦車競走に優勝したことを語っている。<sup>(19)</sup>しかしながら、再び競技者の不足から廃止され、ゲルマニウスが優勝したA・D・17年までプログラムには入っていない。<sup>(20)</sup>もちろん競技に皇帝家の人が出場するには皇帝の承認が必要であった。

1世紀以上の間、止絶えた競技の優勝者を誉えて像を立てる習慣が再びアウグススの時代に復活した。この時代の碑文は長距離競走に優勝したミレミアの競技者を記録している。<sup>(21)</sup>

ゼウスの神殿の外に他の多くの建造物が改修されているが、多くの場合は建物の再建回数を算えることも日付けることも不可能である。新しい建物としてこの時代に建てられたものは恐らく競技場に入る円天井の有蓋通路と運動場に 通じる 柱廊であろう。この形から見てもこれらは後代のものではないし、こうした建物が前世紀に建造されたとは考えられない。またメトローン（母神殿）が再建されたことも疑いない。この小さな神殿は皇帝の神殿になり、その中にはアウグススの巨像が置かれた。その胴体は神殿の近くで発掘されているが、皇帝は笏と雷電を持ったゼウスの像に象徴されている。また神殿の欄間の碑文には「全世界とヘレネの救済者である神の子シーザー・アウグススにエリス人がこれを捧げる」と刻まれている。<sup>(22)</sup>アウグススの像の他に、アテネの芸術家フィラセナイオスとヘギオスの作によるクラウデウスの像、立派な胸当てを装備したチウスの像、ドミチアとゲルマニアの像があった。<sup>(23)</sup>他の皇帝達の像はキレネの宝物殿、ゼウスの神殿、ヘライオン、ヘロデスの泉館の中に置かれた。<sup>(24)</sup>

アウグススに献じられたメトローンは神域の初期の建物フィリップイオンと比較される。共に生きている人間に奉納された神殿であるが、二つの間には重要な違いがある。フィリップイオンはフィリップ自身によって建造され、フィリップとアレクサンダーが自分達の神性の承認を問題上どうでもよいエリス人に課せたものである。他方、メトローンの奉納はアウグススに対するエリス側の随意的な従属行為の産物である。初期の皇帝達は彼ら自身のためでなく、故皇帝への神性を求めたが、オリンピアで発見された碑文にはアウグススは神ではなく、「神の子」、「神の後継者」として記されている。生きている皇帝崇拝に関してはベッラヌス・ラエッスがカエザル・ネルバ皇帝の大司祭として記述されるネルバの時代まで全然見あたらない。<sup>(25)</sup>その他にローマ女神の崇拝を持ち、その導入はヘレニズムへの直接的な挑戦と考えられるけ

(19) Olympia V.220

(20) Olympia V.221

(21) Olympia V.219

(22) Olympia V.366

(23) Olympia III.P.232

(24) Pausanius V.12.6

(25) Olympia V.437

れど、ローマ崇拝の言及はローマ女神の司祭役を握ったフラビウス・ポリビウスの現  
 われる3世紀までローマ人には見いだせないことは重要なことである。<sup>(26)</sup> はるか東方に  
 於てアウグススはこの女神以外の崇拝を禁じたのに対し、オリンピアにはこのロー  
 マ崇拝がなかったことは非常に注目すべきことである。

エリス人が皇帝家を誉えて多くの像を立ててその感謝の念を表現している。特に若  
 いチベリウスはエリス人に人気のあった皇帝にちがいない。戦車競走に優勝したアポ  
 ロニウスはチベリウスを誉えた群像を奉納することによって自分の勝利を記念した。  
 他に2体の像がエリス人によって奉納されている。チベリウスの死後、エリス市とオ  
 リンピアの評議会はチベリウスの息子ドルスと養子ゲルマニクスを誉えた像を奉納  
 している。<sup>(27)</sup>

チベリウスと彼の後継者の下でオリンピアが如何なる影響を受けたかについて何ら  
 書くことができない。ネロが皇帝になる前のカリグラはローマにオリンピアのゼウス  
 像を移すことを命じたが、解体作業を始めたところ「神像が不意に嘲笑したので」走  
 場が倒れて仕事師は逃げ去り、像自身の断固とした拒絶によつて守られた。<sup>(28)</sup>

各種の碑文はネロのオリンピアへの関心を示したものである。芸術家気取りの皇帝に  
 とってオリンピアは彼の広大な虚栄心を訴えるのに絶好のところであった。A. D.  
 67年に開催されるはずの第211回オリンピアードはネロのギリシア旅行の都合により  
 69年までに延期させた。<sup>(30)</sup> 監督官の宿舎は皇帝の別荘に早変わりし、雄壮な凱旋門が建  
 られ、有名な像の若干はローマに移され、先代の優勝者像はその存在によってネロの  
 栄光を傷けるといけなから引き倒され、下水溝に投げ込まれた。貫例を無視して芸  
 術家気取りの皇帝が出場すれば優勝すると考えられる音楽競技が加えられ、競技会に  
 は前例のない10頭立の戦車を自から御して出場したが、途中戦車から投げ出され、コ  
 ースを走り終らぬうちに棄権した。それでも栄冠はネロの頭上に捧げられた。ネロの  
 死後、ゼウス神殿に傷を負わせた恥辱的な思い出を抹殺するためにあらゆる努力がな  
 されている。オリンピアの記録簿から削りとられ、凱旋門は使用されなくなった。オ  
 リンピアで発見された碑文の一つには皇帝の名が丁寧に削除されているものがある。<sup>(31)</sup>

次の半世紀の間、エリスの歴史はフラビイのオリンピア支配の下にギリシアの経済  
 的貧困にもかかわらず、なおも順調に行われていたことを示唆するローマ皇帝の2・  
 3の像と競技に関する栄光を誉えた碑文の他に先代にない空白状態になった。ハドリ  
<sup>(32)</sup>

<sup>(26)</sup> Olympia V. 486~487    <sup>(27)</sup> Olympia V. 426    <sup>(28)</sup> Suetonius 「Caligula」 22  
<sup>(29)</sup> Olympia V. 370, 373, 374    <sup>(30)</sup> Suetonius 「Nero」 23    <sup>(31)</sup> Olympia V. 287  
<sup>(32)</sup> Olympia V. 287

アの時代に入る前の帝国支配下でのオリンピアがどのような変化を生じたかを考えると躊躇せざるを得ない。表面上の形式は前代と同様に残っていたけれど、競技の性格は全く変ってしまった。祭典はもはやギリシア的なものでなくなり、世俗的なものになった。ギリシア全土からの競技者に代ってローマ世界中の競技者（キストス）がオリンピアに集った。<sup>(83)</sup> 競技者の多くは特にアレクサンドリアなどの東方のヘレニズム化した都市からやってきた。ギリシア的な感情と愛国精神が衰えていたので、競技者は増々プロフェッショナル的な色彩を強めた。プロ競技者は都市の名誉というより自分の栄光と利益のために技を争っていた。そのため、競技者はキストイ（Xystoi）というクラブを組織している。これは職業競技者達が有蓋の柱廊で練習したので、そうよばれたといわれ、オリンピアにもそうしたクラブを競技者達は作っている。最も人気のあったのはボクシングとパンクラチオンであるが、これらの種目はローマの影響の下に一層獣的で野蛮になり、死斗的な競技になった。そうした状況の下に買収がたけりたったが、競技の一般的な頹廃の中に競技会の名誉が維持されていたことはオリンピアの伝統力と権威者達の力によるものである。買収の例はBC12年とA.D. 120年に記録されているだけである。<sup>(34)</sup> 特に管理は非常に厳格でアレクサンドリアのアポロニオスの例が示すように登録に遅れて出場禁止になるほどであった。またエリス人はプロ・ボクサーの傲慢な自任と自己宣伝を防止しようと試みている。そのため、A.D. 37年後に彼らは「ヘラクレスの後継者」のタイトルを廃止し、以後如何なる者といえどもレスリングとパンクラチオンの2種目に優勝しても2種目優勝は認めないと宣言している。<sup>(85)</sup>

## (3)

ハドリアとアントニネスの下にギリシア人とローマ人の間の融合は完全になった。それまでのローマ人は皇帝達の汎ギリシア主義にもかかわらず、既してギリシア人に対してその伝統的な軽蔑を依然と実行し、ギリシア人を無視した取扱い方をしていた。しかし、この時代からもはやギリシア人とローマ人の間では差別がなくなった。ギリシア人は市民権を十分に認められ、帝国の最高官となる資格も出来、宮廷はギリシア影響の絶頂期を迎えた。皇帝自身はギリシアの哲学や芸術に心を引かれ、その古代理想と栄光を復活させようとした。そうした皇帝達の保護の下に母国の都市は再びヘレニズムの中心になった。各地の神殿、柱廊、水道、浴場、体育場、競技場などはバドリア、アントニネス帝の世代のものが多く、古い祭礼は復活され、新しい祭礼が創設されて、古代の祭儀と規則は慎重に挙行された。

(83) Olympia V.456 (34) Pausanias V.21.5 (85) Pausanias V.21.10

## 古代オリンピック競技の歴史

ピンダーの時代から保有することのできなかった通俗性と輝きを射った2世紀のヘレニズムのルネッサンスはオリンピックより証拠を持つところは他にない。プルサのデオンはフィデアスに関する論文を演説によって神に捧げ、フレゴンはA・D・137年までのオリンピック記録簿を記載し、彼の仕事は次世紀にアフリカヌスによって引継がれた。「アナカルシス」を書いてルキアンは過去の競技理想を復起させることに努めた。A・D・174年にオリンピックを訪れたパウサニアスは「ギリシア案内記」を書いてオリンピックとその記念物に関するきわめて詳細な記事を伝えた。このように2世紀と3世紀にはオリンピックとその競技会に対する広範囲の関心が数えきれぬほど書き表わされ、実際に祭礼に関する大部分の知識がこの時代の書著に負っている。

これらの著者達がオリンピックに各地から集った群衆、旅行の難儀、収容施設の貧弱さ、暑さと水不足、夜明け前に場所を取って焦土する暑さを忘れて日没まで見物する観客について語るとき、オリンピックの人気を想像することができる。競技熱の新鮮な波が至る所で楽しみと興奮にわけ、競技場と競馬場の試合に男達は政治と戦争の疑似的なものを思い起した。祭典競技の増加によってオリンピックただその名を高めるだけであった。この時代でも、オリーブの葉冠は競技者に一番熱望されたもので、帝国各地からより抜かれた競技者がオリンピックに集った。ギリシア自身の中にまるで競技のはっきりした復活されたようであった<sup>(36)</sup>。さらに「ローマの平和 Pax Romana」の下に陸海を旅行することは容易になり、安全になったので、必然的にオリンピックは東西の会合地になった。従って、ヘラスの人口減にもかかわらず、祭典競技に集った人達はギリシアの自由時代のときのように多数く形どられる。

オリンピックに人を引き出したのは単にスポーツに対する愛好だけではない。食物や酒を持ち込んで観客に売る農民から、ローマの金持ちからパトロンを見つけようとする馬養育人や芸術家まで、常に遠方と附近の各階層の人達を引きつけた巨大な行事であった。大衆が多ければ多れいほど交易の可能性が大きいから、ローマの著作者達はオリンピックの祭礼を「商人のギリシア贅辞」「オリンピック市場」と呼んでいることは意味のあることである<sup>(37)</sup>。

再び、オリンピックは詩人、修辞学者、哲学者の行く場所となり、優勝者に対する名誉像は再び神域に立てられた。2世紀中期の碑文にはアテネのグラウコスが「オリンピック讃歌」をうたった為に評議会の法令にもとづき像をもって誉えられたことが記録され、A・D・233年に日付けられる他の碑文にはペイサ人が潔白な歌をうたった

<sup>(36)</sup> 優勝者名簿にはスパルタ、シキヨン、アエギナ人の名が再び現われている。

<sup>(37)</sup> Gerdiner 「Athletics of Ancient world」 P.44

スπεルケイオスの像をたてたことが記録されている。<sup>(38)</sup>これらの中にあたかも優勝讃歌が復活されているように思われる。同様にして誉えられたソフィスト（修辞学者）の中にはアテネのフラビウス・フィロストラトスの名が見られる。この修辞学者がオリンピアで公的にその能力を発揮したかどうかは分らないが、また行ったことも不可能ではない。特にキュニコス学派の対抗学派は、その宣伝のために祭礼の機会を十分に利用していることは確かであるし、フィロストラトスはネロの迫害を逃れてチアナの神狂家アポロニオスが如何なる方法でオリンピアにやってきて、智と人間らしさ、気性というものを論じたかを語っている。またキュニコス学派の哲人ペレグリノスはオリンピアの祭礼に集った人々の前でヘラクレスのように身を火の中に投じるためにやって来た。単なる虚栄と名誉からなのか、また死んで哲学の勝利を証明しようと心から希望したのかどうかは分らないが、彼はルキアンが辛辣な皮肉と嘲弄の筆で伝えることを夢みたのではあるまい。ルキアンは祭礼の第一日にオリンピアにやって来たとき、ペレグリノスを賞揚したり、罵っている人達を見た<sup>(39)</sup>と記述している。ルキアンもまたオリンピアを4回ほど訪れている。<sup>(40)</sup>

オリンピアに訪問者がよく行くのは単に祭礼時だけではない。パウサニアスが言うように毎日エリス人やその他の人々がゼウスの祭壇に供儀を捧げていた。祭壇は古くからのイアミダイとクリチアダイ家から選ばれたかま番人（manteis）の管理の下に神託と結びついていた。それまでには2人の予見者がいたが、2世紀に向う頃、この数は突然4人になっているから、この時代にギリシア世界全体に神託の一般的な復活があったと思われる。<sup>(41)</sup>更にこの時代は旅行の時代で、ギリシアを訪れることはローマ上流家族の間で長いこと流行して来たが、それまで主に人を引きつけたのは修辞学や哲学を学ぶところとしてのアテネであった。しかしながら、皇帝達の場合には古代ギリシアの風習・制度・芸術に関心が湧き起っていたので、ギリシアを旅行することはオリンピアを訪れなければ完全でないというまでになっていた。世紀末に聖典注釈者（Exegetes）が現われたのも増加しつつある旅行者の必要性に応じたものだろう。

この時代のオリンピアの碑文は古代精神について非常に興味深い例を2・3与えている。第1の碑文は「一千年」と呼ばれるローマ史を書いた歴史家アシニウス・クオドラスを誉えたもので、その中で彼はローマ建国と第1回オリンピアードを一致させている。このお世辞的な心づけに対してエリス人は「言行ともにオリンピアを誉えた」<sup>(42)</sup>から彼の像を立てている。第2の碑文はアスクレピアテスによって奉納された円

③⑧ Olympia V.457,482 ③⑨ Philostrátos 「Gymnastic」 IV.31

④⑩ Lucian 「De Morte Peregrini」 31 ④① Olympia V.140 ④② Olympia V.356

盤に関するもので、これに従うと祭礼の起源がBC1580年にさかのぼってしまう。<sup>(43)</sup>同じ古さに対する愛好から推定すると、古代の儀式的な競技会と供儀のすべては慎重に維持されていたことが分る。

各地に八百長競技が広まっていたけれど、オリンピックの清廉潔白なスポーツは宗教的な感謝の中に維持し、継続されていた。A.D. 125年に八百長競技の例が最後の記録として残されているが、<sup>(44)</sup>それに関してパウサニアスは「人間がオリンピックの神を見くぶり、競技会に買収されたり、したりすること事態が不思議である」<sup>(45)</sup>と意味のある解説をしている。同じように競技会を賞揚する考え方はフィロストラトスの語るところによれば監督官がエリスを去る競技者に「オリンピックの祭礼にふさわしい態度で練習し、かつて怠惰な行為と不劣な行為のなかった者は立派な勇気を持って行け。思うように練習しなかった者は勝手に消えてどこへでも行け。」<sup>(46)</sup>とあてる告別の辞に明らかにされている。この理想と実際の競技状況は何んと対称的であろう。不自然な競技の復活、非科学的な練習組織、競技者の道徳的・身体的頹廃、全般的な墮落と不正行為に関する記事をフィロストラトス、プルターク、ガレンなどがその書物の中にふんだんに取りあげているが、これらの悪に対してオリンピックは責任がない。

時代の思想を魅惑したと思われるフィデアスのゼウス像はオリンピックの呼び物ではなかった。訪問者の多くは宗教によるのではなく、刺激に対する愛好、スポーツに対する愛好、勝利に対する愛好によって引きつけられた。フィデアスの理想は思想家や哲学者に、結局、皇帝までにも訴えたようであるが大衆のための使命を持たない。この時代の宗教と哲学は密接にとけあい、形而上学的な理論は道徳的な生活指針を見出し、この事物をもって偶像崇拜を正当化し、単一化することを求めた実利的な哲学に場を譲った。<sup>(47)</sup>従って、信仰は未来の幸福を約束することについて現在の苦痛に置き代えるものを与える東洋的な神の崇拜に変わり、これらの崇拜は至る所で確立された。宗教界はそうした傾向にあったけれど、オリンピックのゼウスは敵もなく支配し、キリスト教の斗争に於て哲学的な偶像崇拜の最後の砦をオリンピックに作らせた。

泉館を除いて帝国時代に造られた各種のローマ建造物を日付ける手掛りはないが、恐らくその大部分が2世紀と3世紀に建てられたものであろう。それらは性質上非宗教的で、数多くの訪問者や駐在官を収容し、慰安するために造られたものである。そ

<sup>(43)</sup> 工学院大学研究論叢2号「オリンピック競技の起源」P.2

<sup>(44)</sup> Pausanius V.21.16 <sup>(45)</sup> Pausanius V.21.16

<sup>(46)</sup> Gerdiner Athletic of Ancient world P.224

<sup>(47)</sup> 精神界のストア概念は、すべて存在する神が精神の部分的な表現と見做されたからこれを助長した。

の中でプリュタネイオンの北とグラデオス川岸のはるか南にある2つのテルマエ（温浴場）が注目される。またレオニダイオンとテオコレオンは再建され、柱廊がプリュタネオンとポウレウテリオンの前に建られ、多くのギリシア建築が増築され再建されているが、全ギリシアに散ばっているハドリア帝の施し物はオリンピアに残っていない。

復活されたオリンピアの繁栄は3世紀中期まで持ちこたえたことが少なくとも碑文から明らかである。碑文が示すように戦車競走は遠方の富豪な競技者を引きつけていた。戦車競走の優勝者テオプロポスの像の台座に刻まれている対句には彼が元老院議員であったことが示されているし、アテネ人の碑文にはA. D. 245年にアンチコス・メテスの事務所を開いたドミッス・プロメセウスが戦車競走に優勝したと記録されている。<sup>(48)</sup> また帝国時代に笛吹き人や触れ人の競技が重要性を増していることも注目される。その誇大な碑文は<sup>(49)</sup>プロ競技者のものに匹敵する位である。優勝者の一番最後の碑文はA. D. 241年から261年に渡ってオリンピアで4連勝を飾った触れ人ベレリウス・エクレクトスのものである。さらに彼はスミルナ、フィラデルフィア、ヒエロポリス、トリポリス、ペルガの評議官であったことも、またアテネとエリスの市民権を受けていたことも記録されている。名譽的な碑文にはフラビウス・ポリビウス<sup>(50)</sup>ものがある。これはアカイア人とメッサニア人によって奉納された彼の像について語られたもので、ローマ女神の司祭者として記されている。

A. D. 267年にギリシアはゴート族の侵入を受け、怠惰から目覚めて国をあげて戦い、デキボスの武勇によって撃退したけれど、国土は蛮族の襲撃にひどく苦まされたにちがいない。もはや「ローマの平和 Pax Romana」の保証はなかった。この時代から祭礼が行われたことを告げる僅かな言及を除いて記録は黙している。しかし、ゴートの勢力以上にオリンピアを恐れさせたのはあらゆる権力を征服しつつあったキリスト教の力であった。オリンピアは滅亡を運命づけられた。運命の皮肉といってよいのか、最後に記録される優勝者はA. D. 385年にボクシングに勝利を収めたアルメニアの皇子バラズダテスであった。8年後の第293回オリンピアードが祭礼の最後となり、その翌年のA. D. 394にテオドシウスI世の勅令によって廃止された。他の記事に従えば、全ローマ帝国のあらゆる異教神殿の破壊をA. D. 426年に公布したテオドシウスII世の時代まで燃っていたといわれる。

(48) Olympia V. 239

(49) Olympia V. 232, 237, 242

(50) Olympia V. 486, 487

## 結 語

古代オリンピック競技のきわめて高い特徴は非科学的な原始宗教の粋の中に生長したことで、この粋がなければ、4年毎にA・D・393年まで過少に数えても293回の競技会は継続しなかったと思われる。ゼウスを頭とする12神がすべてのヘラスの国も民も思いのままに左右するという畏怖と超信はオリンピックを絶対的の神聖なものにした。当代随一の哲学者、芸術家、政治家、将軍などがきびずを接してオリンピックの祭典に参詣している。斗争がつづいたヘラスの歴史であったが、その緩和剤としてこの競技を利用しようとする各都市の政治家の意識があったことは否定できない。後にマケドニアのアレクサンダーやアウグススをはじめとするローマの皇帝達などがヘラス征服後もその人心収斂の手段としてオリンピックの祭礼を残しておいたことを認めなければならない。ヘレネの文化が花を開き、各都市国家とも青少年をオリンピックへ派遣し、その都市の偉大さを誇示しようとして必然的に青少年達を国家アマチュアとして育成した。オリンピック競技も増々盛大になると共にオリンピックの優勝は都市の名誉という国家アマチュアの目的から優秀競技者の引き抜きや勝負の買収などが現われた。マケドニアやローマに併合された後も、その政策としてオリンピックの存続は公認されたが、紀元後間もなく、ローマの勢力が衰えて、この辺境の植民地も本国とおなじく外敵の侵入をみるに至った。おそらく3世紀頃から大会は情勢で開催されていたと考えるべきであろう。競技会に終止符をうったのはローマ帝国が新興宗教キリスト教に屈伏し、それ以外の信仰を勅令によって禁止したためにオリンピック競技の開催禁止・神殿の破壊が命ぜられたのである。

(昭和39年10月4日)

## 主 要 参 考 文 献

1. 「オリンピック史」川本信正、鈴木良徳著 日本出版協同株式会社
2. 「オリンピック」村川堅太郎著、中央公論社
3. 「出土史料によるギリシャ史の研究」粟野頼之祐著、岩波書店
4. 「古代オリンピック競技の歴史」メゾ著、大島鎌吉訳
5. 「古代都市」フェステル・ド・クーランシュ著、田辺貞之助訳、白水社
6. 「ギリシャ文化史」ブルクハルト著、新関良三訳、東京堂
7. 「ギリシャ史研究」原随園著、創元社
8. 「Olympia」Gerdiner, Okford.
9. 「Olympia」Ernst Curtius und Friedrich Adler, Berlin.
10. 「Description of Greece」Pausanius, Eneryman Library



阿 部 正 臣

11. 「Olympic Victor Monument」 Hyde, Walter. Washington
12. 「Athletics of the Ancient world」 Gardiner. Oxford
13. 「Everydaylife in Ancient Greece」 Robinson. Oxford at the Clarendon Press
14. 「Ancient History」 J. B. Newman George G. Harrap.
15. 「Educational Ideals in the Ancient world」 W. Barclay. Collins

(本学助手)